

浅川扇状地遺跡群

# 三輪遺跡（9）

—北野建設第二寮新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2019年3月

長野市教育委員会



調査地周辺 航空写真（南東から）



調査区 航空写真（上が南）

# 序

埋蔵文化財は、「土地に刻まれた歴史」といわれ、遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、当時の人々の生活を今に伝え、郷土の成り立ちと文化を理解するうえで重要な役割を持っています。

善光寺平に位置する長野市には、数多くの遺跡が周知されていますが、この中で開発事業等によって保存が困難になるものについては、事前に発掘調査を行い、記録保存という形で後世に残していく手段がとられています。

ここに長野市の埋蔵文化財第154集として刊行いたします本書には、社員寮の新築工事に伴う発掘調査によって得られた成果を、浅川扇状地遺跡群に属する「三輪遺跡」として詳しくまとめてあります。発掘調査では、古墳時代後期および平安時代の集落跡が確認され、また、住居跡からは破壊されたカマド跡も見つかっております。このような成果が文化財に対する一層のご理解と、地域の歴史解明にお役立ていただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力を賜りました事業関係者や地域の皆様、発掘調査に携わっていただいた皆様に感謝申し上げます。

平成31年 3月




長野市教育委員会  
教育長 近藤 守

# 例 言

- 1 本書は、長野県長野市三輪地区における「北野建設第二寮新築工事」に伴い実施された埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査の実施については、事業主体者である北野建設株式会社 代表取締役社長 北野貴裕 からの委託により、長野市長 加藤久雄 が受託し、長野市教育委員会（担当：文化財課埋蔵文化財センター）が直営事業として実施した。
- 3 発掘調査地は、長野県長野市三輪三丁目619番2 および619番6 に位置する。開発事業面積のうち埋蔵文化財の保護対象面積は898.80㎡、調査対象面積は730㎡である。なお、実質発掘調査面積は580㎡である。
- 4 現地における発掘調査は、平成29年（2017）7月24日から同年9月12日にかけて実施した。
- 5 本調査地は三輪遺跡内に位置する。三輪遺跡においては現在までに複数の地点で発掘調査を実施しているため、起因事業名を冠し、三輪遺跡 北野建設第二寮建設地点と呼称する。
- 6 現地における発掘調査は日下と篠井が担当し、各調査員がこれを補佐した。本書の編集は飯島の指導の下篠井が担当し、埋蔵文化財センター各職員がこれを補佐した。なお、執筆分担は以下の通りである。  
飯島哲也 第1章 第1節  
鈴木時夫 第1章 第4節、第3章 第2節  
田中暁穂 第3章 第2節  
篠井ちひろ 第3章 第2節および上記以外
- 7 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで保管している。なお、出土遺物の注記記号は、アルファベットで「AMKR」と表記してある。
- 8 発掘調査の実施に際し、委託者である北野建設株式会社におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解をいただき、絶大なご協力を賜った。

# 凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

- 1 本調査において確認した遺構・遺物の一部については、その資料化の義務を果たせなかったため、本書に掲載していない。しかし、できうるかぎり追認できるよう基礎データはそのまま保管してある。
- 2 掲載した地図は上が北を示す。また実測図等に掲載した方位は、全て座標北を表している。
- 3 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系(国家座標)の第Ⅷ系(東経138°30'00"、北緯36°00'00")の座標値(日本測地系2011)と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所に委託した。
- 4 遺構図は、調査区全体図を1/200、遺構実測図を1/80または1/40の縮尺に統一してあるが、微細図その他については適宜縮尺を提示した。なお、遺構実測図における「●1」等の黒点は遺物の出土位置を示す。
- 5 遺構の略記号は以下の通りである。また、番号を付した遺構で整理調査時の検討によって欠番となったものについては、遺構一覧表において旧番号と欠番表示を併記した。  
    竪穴住居跡：S B      溝跡：S D      土坑：S K      小穴：S P
- 6 遺構観察表において、規模は単位をm、計測は長軸×短軸で表記した。また、出土遺物の重量は全て単位をgで統一している。
- 7 遺物に関しては、調査員により原寸にて実測図を作成し、基本的に実測図1/4に統一し、縮尺を各図に明示してある。
- 8 遺物観察表の記載凡例に関しては遺物観察表39ページに記載した。遺物実測図において、断面黒塗りは須恵器を示す。その他のトーンの凡例は以下の通りである。  
     黒色処理     灰釉陶器     緑釉陶器
- 9 遺物写真の縮尺は任意である。
- 10 土層の色調記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』によるものである。

# 目次

巻頭写真

序

例言

凡例

目次

## 第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 試掘調査…………… 4

第3節 調査体制…………… 5

第4節 調査経過（調査日誌抄）…………… 6

## 第2章 調査地周辺の環境

第1節 遺跡の立地…………… 7

第2節 三輪遺跡の既往調査…………… 8

第3節 周辺の遺跡…………… 9

## 第3章 調査成果

第1節 調査の概要…………… 12

第2節 遺構と遺物…………… 14

1 竪穴住居跡

2 溝跡

3 土坑

4 小穴

5 そのほか

第4章 まとめ…………… 54

抄録

奥付



発掘作業員集合写真

## 挿図目次

図1	調査地位置図 (1/50,000) ……	1	図17	遺構実測図6 (SB11・12・13・14) ……	28
図2	調査地位置図 (1/5,000) ……	3	図18	遺構実測図7 (SB2・15・16) ……	29
図3	保護対象範囲及び調査区 (1/1,000) ……	3	図19	遺構実測図8 (SB17・18・19・20) ……	30
図4	試掘調査位置図 ……	4	図20	遺構実測図9 (SD1・SK1・2・4・7) ……	31
図5	試掘調査土層柱状図 (1/20) ……	4	図21	遺物実測図1 (SB1) ……	40
図6	調査地周辺の旧地形図 (1/3,000) ……	7	図22	遺物実測図2 (SB2・3) ……	41
図7	三輪遺跡の既往調査地位置図 (1/5,000) ……………	9	図23	遺物実測図3 (SB4) ……	42
図8	周辺遺跡分布図 (1/25,000) ……	11	図24	遺物実測図4 (SB5・6) ……	43
図9	基本土層柱状図 ……	12	図25	遺物実測図5 (SB7・11・12) ……	44
図10	調査区南壁土層堆積状況図 ……	12	図26	遺物実測図6 (SB11・12・13・14) ……	45
図11	調査区全体図 (1/200) ……	13	図27	遺物実測図7 (SB15・17・18) ……	46
図12	遺構実測図1 (SB1) ……	23	図28	遺物実測図8 (SB17・18・19・20、SK2・ 4) ……	47
図13	遺構実測図2 (SB3) ……	24	図29	遺物実測図9 (検出面・包含層、土製品) ……………	48
図14	遺構実測図3 (SB4) ……	25	図30	遺物実測図10 (石製品) ……	49
図15	遺構実測図4 (SB5) ……	26			
図16	遺構実測図5 (SB6・7・10) ……	27			

## 表目次

表1	遺構一覧 ……	22	表2	遺物観察表 ……	36
----	---------	----	----	----------	----

## 写真目次

遺構写真1 ……	32	遺物写真1 ……	50
遺構写真2 ……	33	遺物写真2 ……	51
遺構写真3 ……	34	遺物写真3 ……	52
遺構写真4 ……	35	遺物写真4 ……	53

# 第1章 調査経過

## 第1節 調査に至る経緯

当該開発行為に関する埋蔵文化財の事務手続きは、事業主体者である北野建設株式会社からの照会があった平成29年1月16日に遡る。担当者から起因工事である北野建設第二寮新築工事の概要について説明を受け、当該地が浅川扇状地遺跡群の範囲内にあることから、文化財保護法第93条の規定に基づく届出が必要であること、また周辺で発掘調査が行われていることから、試掘調査の実施を含む保護措置が必要となる旨を回答した。

平成29年5月31日に北野建設株式会社代表取締役社長（以下、事業主体者）より、文化財保護法93条第1項の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」の提出があり、平成29年6月5日付け29埋第2-55号にて長野市教育委員会教育長から「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」の通知を

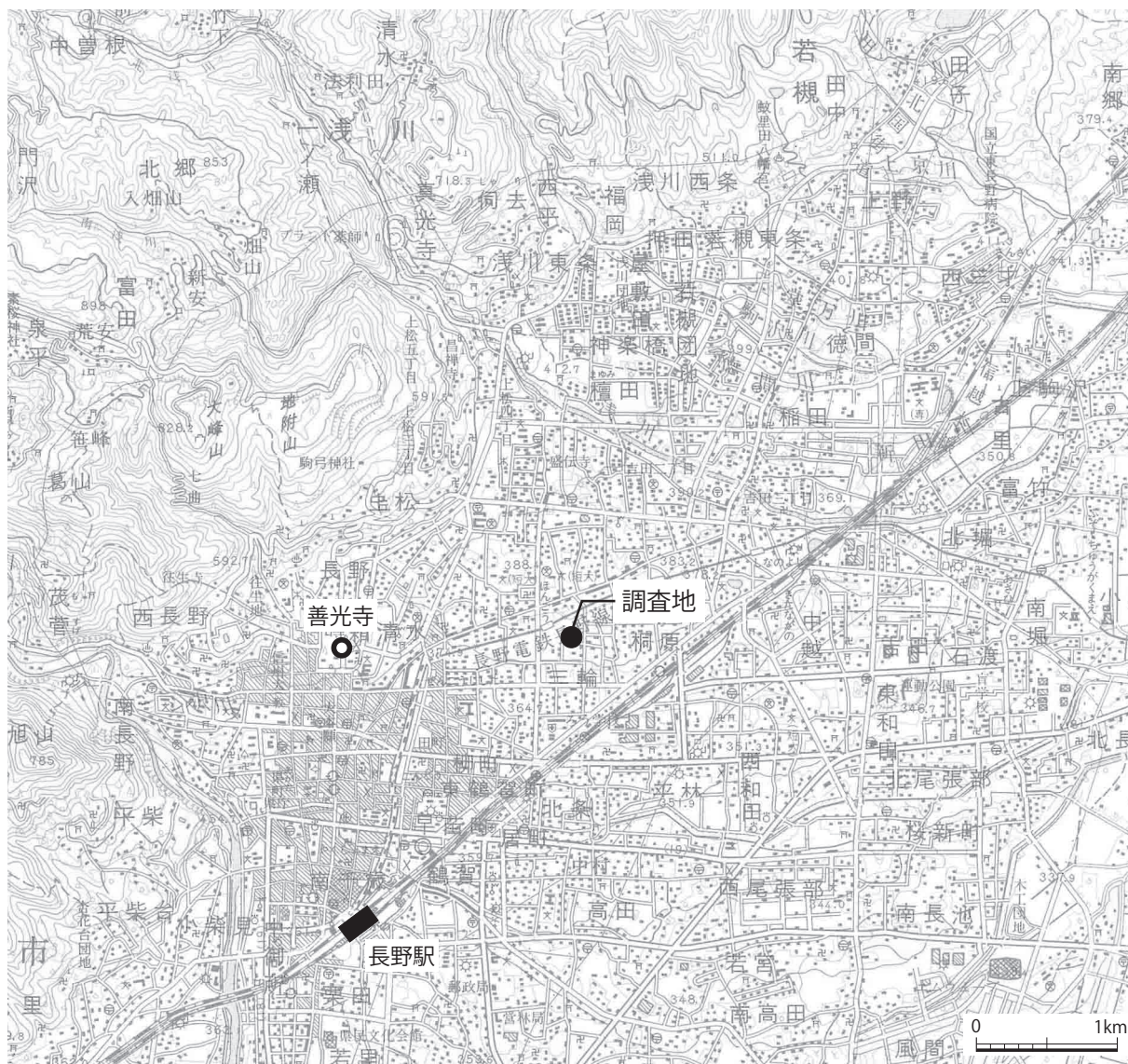


図1 調査地位置図 (1/50,000)



行い、保護措置として「発掘調査（試掘調査）」を指示している。平成29年7月7日付けで事業主体者から「試掘調査依頼書」及び「土地所有者の承諾書」の提出があり、同年7月13日に試掘調査を行った。その結果、良好な埋蔵文化財の包蔵が認められ、同年7月20日付29埋第5-10号にて報告した。その後協議の結果、埋蔵文化財への影響が回避できない建物基礎部分及び駐車場部分の範囲について、本発掘調査を実施することとなった。

平成29年7月21日付けで事業主体者から「発掘調査依頼書」が提出され、これを受理し、同年7月24日付けで北野建設株式会社と長野市教育委員会との間で「埋蔵文化財の保護に関する協定書」を締結した。この協定書に基づき、平成29年度分の業務委託として、事業主体者と長野市長との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を同年7月24日付けで締結した。

発掘調査は、平成29年7月24日より9月12日まで現地における発掘作業を行い、実質調査日数は51日間である。調査終了後、長野県教育委員会教育長あてに平成29年10月27日付29埋第137号にて「発掘調査終了報告書」を、委託者宛には同日付29埋第136号にて「発掘調査現場作業の終了及び引渡しについて（通知）」を、長野中央警察署長宛には同月30日付29埋第138号にて「埋蔵文化財の発見について（通知）」を提出している。

その後、基礎整理作業へと移行したが、協定書に基づき、本格的な発掘調査報告書の刊行までの整理調査は平成30年度に実施し、本書の刊行に至った。



調査地周辺航空写真



図2 調査地位置図 (1/5,000)

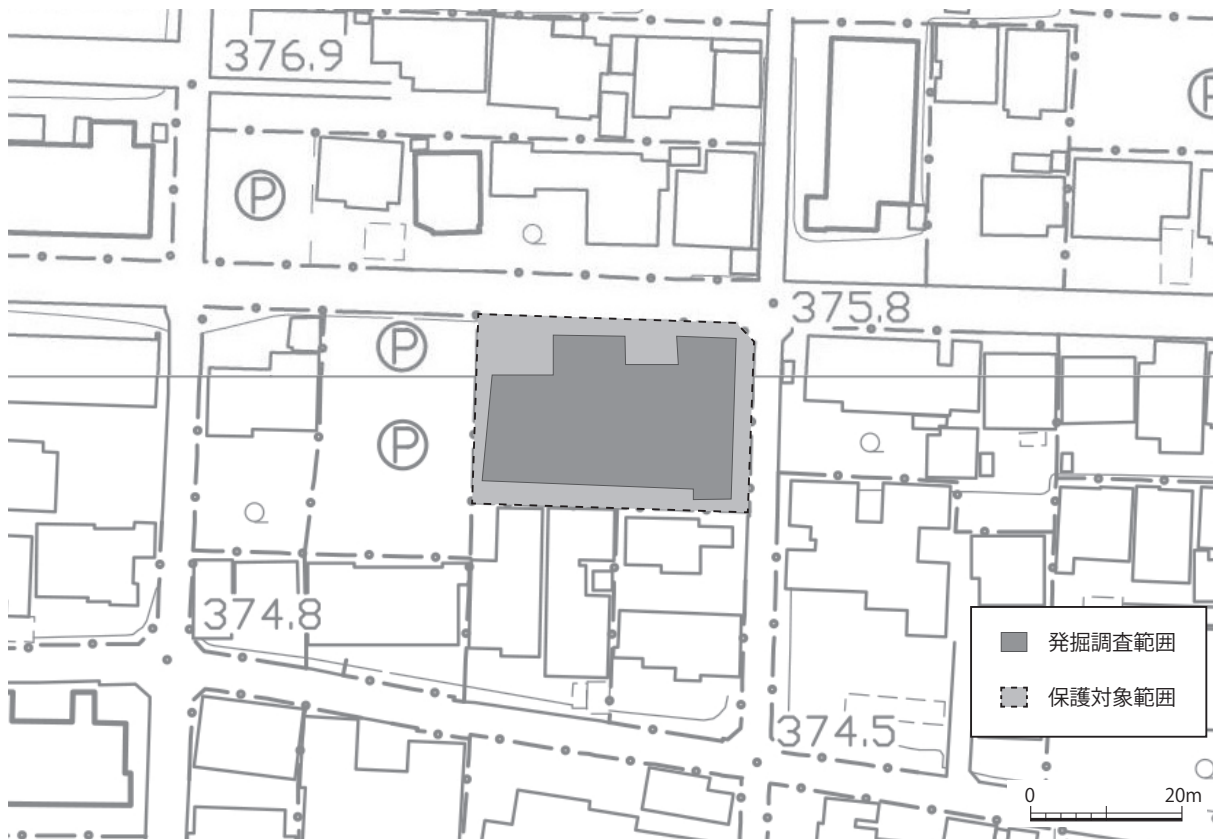


図3 保護対象範囲および調査区 (1/1,000)

## 第2節 試掘調査

平成29年7月13日に、事業予定地において埋蔵文化財の包蔵状況の確認を行うことを目的として、試掘調査を実施した。

調査方法は、重機（バック・ホー）で試掘坑（トレンチ）を掘削し、坑内断面の土層観察により遺物包含層の有無および深さ、土層の堆積状況を確認するものである。試掘坑は、事業予定地内の埋蔵文化財の包蔵が考えられる任意の地点に2箇所設定した（図4）。

試掘調査の結果、AトレンチとBトレンチの地表下約20～45cmで炭化物および土器片を含む暗褐色粘質土（2層）が確認された。いずれのトレンチでもこの層の落込みが認められた。また、Bトレンチでは落込みの底部から炭化材が検出された。以上より、AトレンチおよびBトレンチで確認された暗褐色粘質土（2層）が遺物包含層と判断され、事業予定地内においては埋蔵文化財が良好な状態で埋蔵されている可能性が極めて高いことを確認した。

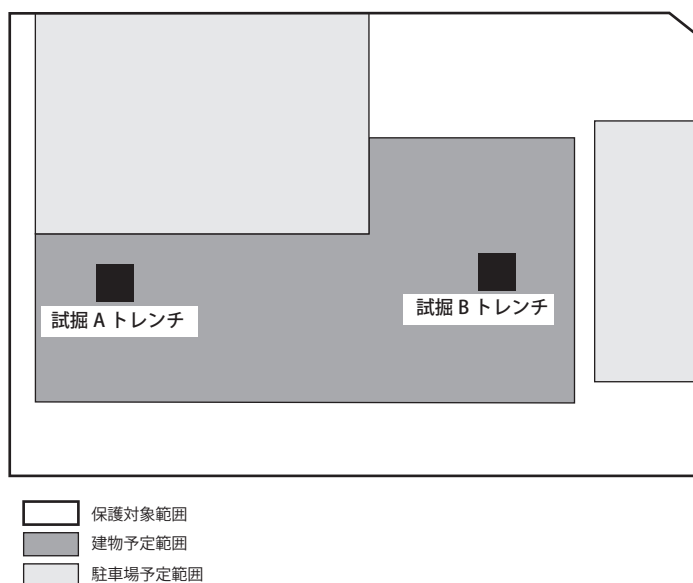


図4 試掘調査位置図

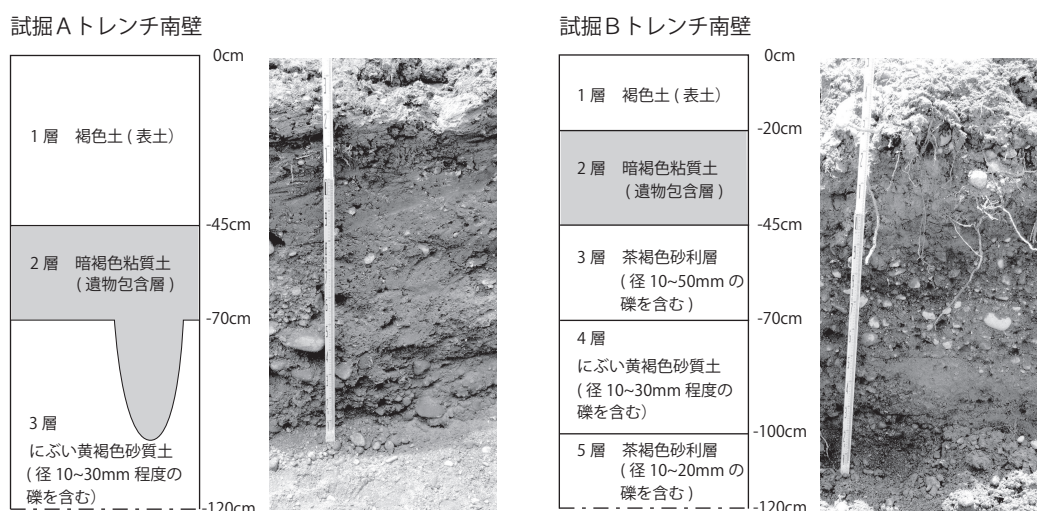


図5 試掘調査土層柱状図（1/20）

### 第3節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直営事業として、文化財課埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下の通りである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤 守
統括責任者	長野市教育委員会	教育次長	松本孝生
統括管理者	長野市教育委員会文化財課	課長	青木和明（平成29年度）
		課長	小柳仁彦（平成30年度）
調査責任者	長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター 主幹兼所長 石田正路		
調査担当者	長野市教育委員会文化財課（埋蔵文化財センター担当） 課長補佐 飯島哲也		
調査機関	埋蔵文化財センター		
	庶務担当 係長	小林晴和	
	事務職員	坂戸雅子（平成30年度）	
	事務職員	宮崎千鶴子	
	調査担当 係長	風間栄一	
	主事	小林和子	
	研究員	日下恵一（主任調査員・平成29年度）、田中暁穂、篠井ちひろ（調査員）、遠藤恵実子（調査員）、清水竜太、鈴木時夫（調査員）、高津希望（調査員・平成29年度）	
発掘作業員	植木義則、上原律江、内田正征、江守久仁子、岡沢貴子、岡宮純子、大日方東、金井 節、北村まどか、後藤大地、塩入洋子、杉本千代、月岡純一、中村泰明、藤澤優子、峯村茂治、峯山真由美 宮尾弘子、山口勝己、山崎孝之、渡辺由美		
調査員（整理）	青木善子、鳥羽徳子、武藤信子、向山純子、市川ちず子（平成30年度）		
調査補助員	市川ちず子（平成29年度）、窪田順（平成29年度）		
整理作業員	清水さゆり、関崎文子（平成29年度）、西尾千枝、待井かおる、三好明子、飯島早苗（平成30年度）、後藤大地（平成30年度）、宮島恵子（平成30年度）		
遺構測量委託	株式会社写真測図研究所		
X線写真撮影協力	長野県立歴史館		

#### 第4節 調査経過（調査日誌抄）

- 7月24日（月） 重機による表土除去作業開始。  
（～7月26日）
- 7月31日（月） 作業員雇用開始。遺構検出開始。  
（～8月7日）
- 8月1日（火） 降雨により作業休止。
- 8月2日（水） 遺構掘り下げ開始。
- 8月8日（火） 降雨により作業休止。
- 8月9日（水） SB2・4・5掘り下げ開始。
- 8月10日（木） SB6掘り下げ開始。
- 8月11日～16日まで現場作業休止。
- 8月17日（木） SB1、SK掘り下げ開始。作業員8名増員。
- 8月23日（水） SB3・8掘り下げ開始。
- 8月29日（火） 遺構測量。市立更北中学校2年生2名職場体験。（～30日）
- 8月30日（水） SB10～12掘り下げ開始。
- 9月1日（金） 遺構測量。
- 9月4日（月） SB13掘り下げ開始。作業員4名増員。
- 9月6日（水） SB14掘り下げ開始。遺構測量。
- 9月7日（木） SB15掘り下げ開始。南壁断面図作成。
- 9月8日（金） 空撮。全景写真撮影。遺構測量。
- 9月11日（月） SB17～20掘り下げ開始。
- 9月12日（火） 遺構測量。機材撤収。発掘作業終了。



検出作業風景



発掘作業風景



更北中学校職場体験



発掘作業風景



測量作業風景

## 第2章 調査地周辺の環境

### 第1節 遺跡の立地

三輪遺跡が所在する長野市は、長野県北部に位置しており、長野盆地とその東西の山地に市域を広げる。長野盆地は北東-南西方向に長い紡錘形を呈する盆地で、長さ約30km、幅約10kmを測る。盆地内を長軸方向に千曲川が縦貫し、東西の山地からは犀川、裾花川、浅川、保科川などの千曲川の支流諸河川が流入している。これらの河川は活発な堆積作用によって盆地内に大小の扇状地形を形成した。この中で、浅川扇状地は、長野市北西部の飯縄山を水源とする浅川が形成した扇状地である。浅川扇状地は、浅川東条を扇頂として南東方向になだらかに傾斜する大規模な扇状地で、南は城東町・西和田で裾花川扇状地と接し、東端は金箱・富竹付近で千曲川氾濫原の後背湿地に接する。浅川扇状地上では三輪遺跡を含め多くの遺跡が発見されており、これらの遺跡を総称して浅川扇状地遺跡群と呼称している。

今回調査を実施した三輪遺跡は、浅川扇状地の西端中央部に位置する遺跡である。三輪遺跡の名称は、郷土史研究家の霜田巖氏によって提唱されたのが始まりで、霜田氏は土器の分布が見られた相ノ木地籍から本郷地籍を遺跡範囲とした。本調査地は、この三輪遺跡想定範囲の中では東端付近に位置している。大正15年測図の地形図(図6)によると、扇状地内に形成された尾根上微高地にあたる場所で、北北西から南南東に下る緩斜面地である。なお、遺跡が所在する長野市三輪地区は、地区の中心部を県道長野豊野線(旧北国街道・通称相ノ木通り)

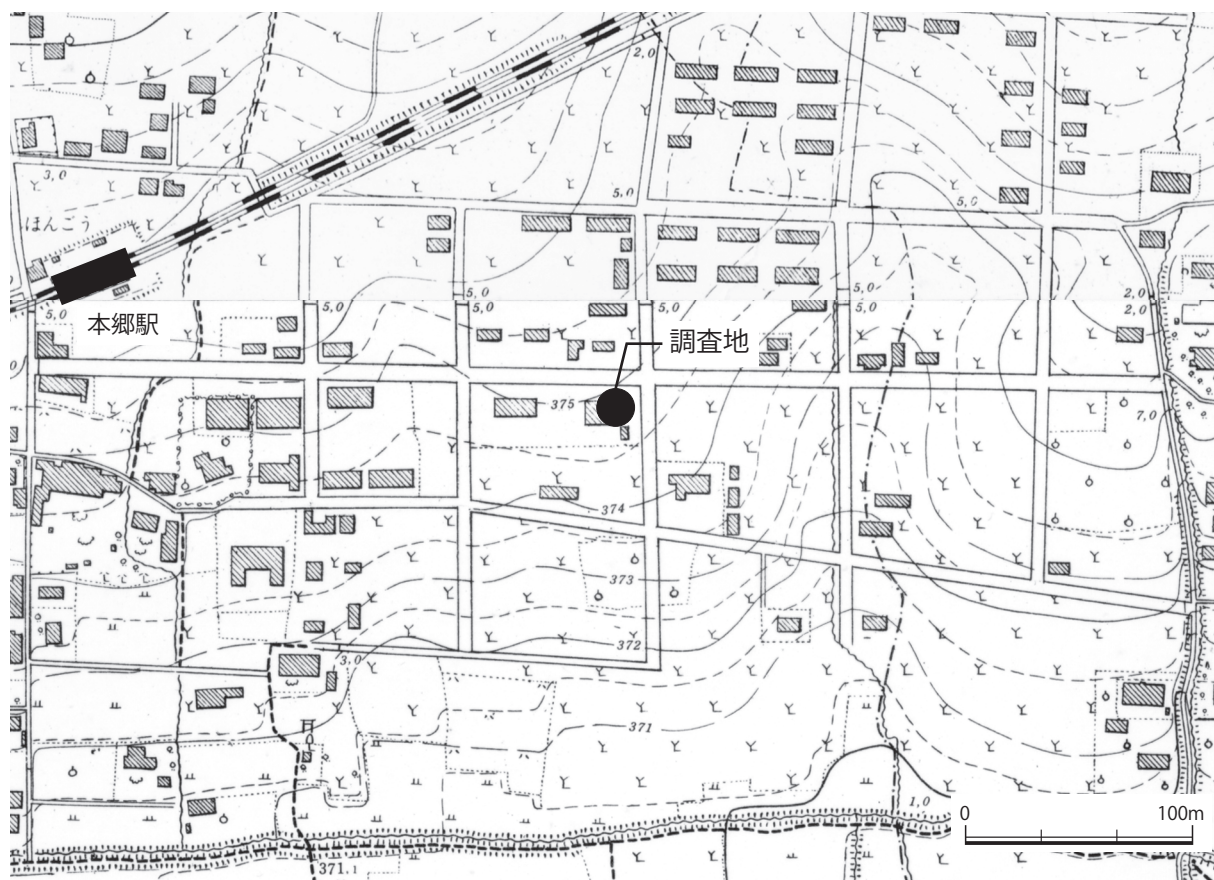


図6 調査地周辺の旧地形図(1/3,000)

が通り、市街地からの利便性も高いことから、昭和20年代後半から地区の南部を中心に開発が進んだ地域であり、現在は閑静な住宅街が広がっている。

## 第2節 三輪遺跡の既往調査

三輪遺跡では、現在までに8地点で発掘調査が実施された。以下、各調査の概略を記す。なお、地点名の先頭に付した番号は図7の地点番号と一致する。

### (1) 三輪小学校地点（昭和50年、同51年、同53年調査）

3次にわたり、合計約2,200㎡の発掘調査を実施した。検出した遺構の総数は、竪穴住居跡15軒、溝跡4条、土坑3基である。竪穴住居跡の時期は弥生時代後期、古墳時代中期から後期および平安時代で、主体となる時期は古墳時代中期から後期と平安時代である。1次調査で検出された古墳時代後期の竪穴住居跡2軒のうち、1軒は1辺10mを測る大型の方形住居で、床面からは建築部材と見られる多量の炭化木材が検出されている。

### (2) 本郷住宅地地点（昭和60年調査）

道路部分約450㎡の発掘調査を実施した。古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡6軒、溝跡4条、土坑1基を検出している。主体となる時期は平安時代で、10世紀から11世紀にかけてと見られる竪穴住居跡を5軒検出している。

### (3) 国鉄本郷団地地点（平成2年調査）

道路部分約320㎡の発掘調査を実施した。弥生時代後期、古墳時代および奈良・平安時代の竪穴住居跡6軒の他、溝跡2条、土坑12基を検出した。この中で中世の土坑が5基検出されており、覆土中からは13世紀から14世紀初頭の青磁や白磁といった輸入陶磁器や珠洲焼の播鉢が出土している。

### (4) 長野県職員宿舎建設地点（平成4年調査）

面積約900㎡の発掘調査を実施した。平安時代の竪穴住居跡2軒の他、掘立柱建物跡1棟、溝跡10条、土坑4基、竪穴状遺構2基、柱穴群1箇所を検出した。調査区南部では平安時代の大溝が検出されている。中世では、溝跡および五輪塔埋納遺構が検出され、国鉄本郷団地地点の調査結果と合わせて近隣に中世信仰に関する遺構がある可能性が示唆されている。

### (5) (仮称) 滝沢マンション地点（平成5年調査）

面積約280㎡の発掘調査を実施した。弥生時代後期末の竪穴住居跡1軒の他、溝跡1条、土坑2基、井戸跡1基を検出した。このうち、溝跡は弥生時代後期末から古墳時代初頭の河川跡と見られる大溝である。三輪遺跡では検出数が少ない弥生時代の遺構が見つかった点が注目される。

### (6) 三輪保育園地点（平成7年調査）

面積約460㎡の発掘調査を実施した。弥生時代後期から奈良時代の竪穴住居跡計6軒の他、溝跡1条、土坑1基を検出した。

(7) 三輪9丁目団地造成工事地点（平成26年調査）

道路部分約170㎡の発掘調査を実施した。平安時代の竪穴住居跡2軒、溝跡2条、土坑1基を検出している。竪穴住居跡は8世紀末から9世紀中頃の構築と推定される。また、カマド内から柄香炉を模したと考えられる黒色土器が1点出土した。

(8) (仮称) 三輪三丁目マンション建設工事地点（平成26年調査）

面積約106㎡の発掘調査を実施した。平安時代の竪穴住居跡3軒、土坑19基、溝跡1条、小穴11基を検出している。また、平安時代の遺構の下に黒色粘質土の堆積が確認され、近接する(4)長野県職員宿舎建設地点で検出された平安時代の大溝に繋がるものと推察される。

(9) 北野建設第二寮地点（平成29年調査・本報告書）



図7 三輪遺跡の既往調査地位置図 (1/5,000)

### 第3節 周辺の遺跡

浅川扇状地は市内有数の遺跡密集地であり、扇状地内に立地する遺跡を包括する「浅川扇状地遺跡群」が設定されている。本節では、浅川扇状地内の遺跡について時期ごとに概観する。なお、図8のアミカケ範囲は浅川扇状地遺跡群の範囲を表している。

縄文時代の遺跡は、松ノ木田遺跡 (17)、檀田遺跡 (13)、浅川端遺跡 (14)、吉田古屋敷遺跡 (21) 等が挙げ



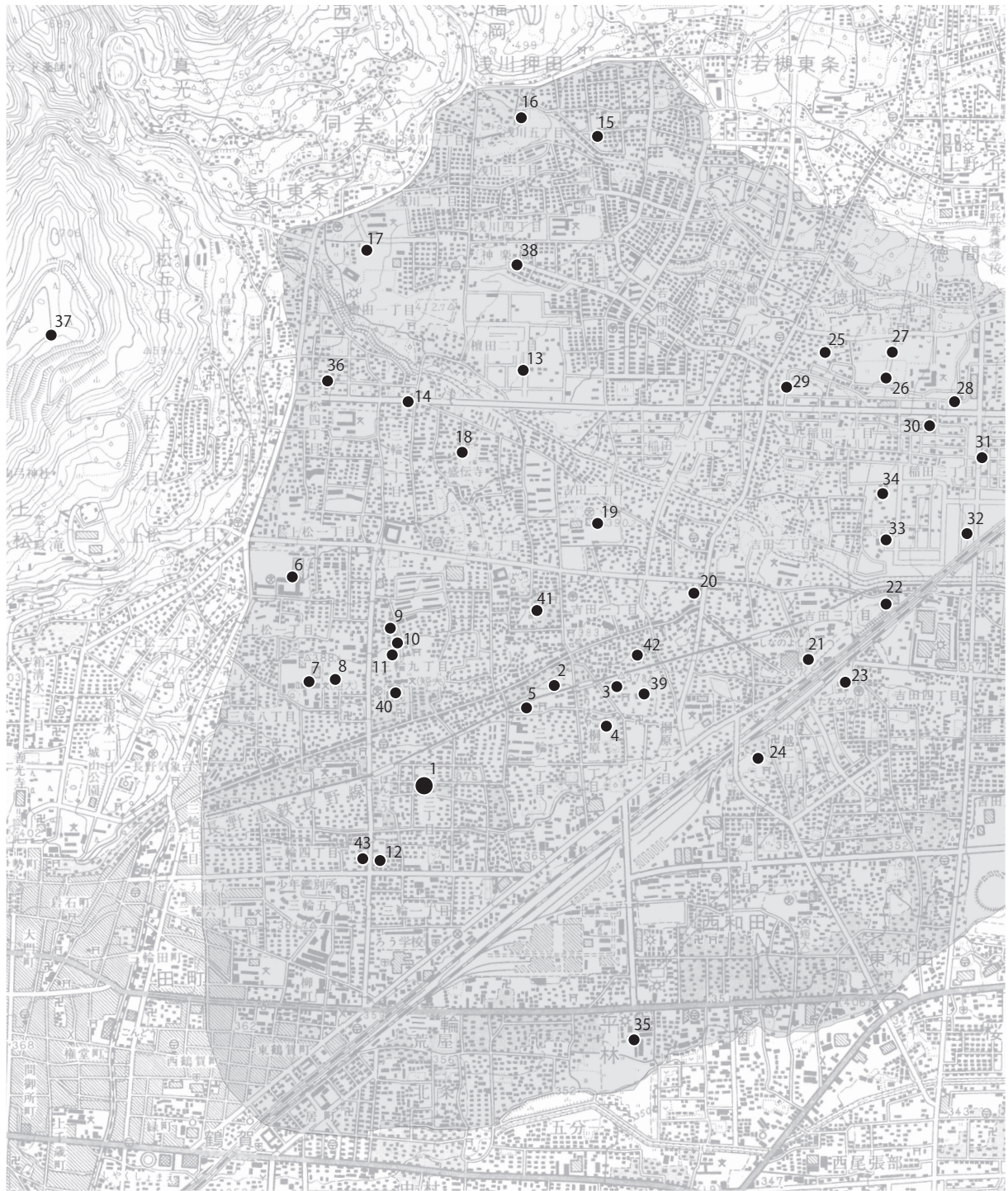
られ、扇状地の扇頂部や扇中部に多く確認されている。浅川端遺跡では前期前葉の遺構が検出されており、盆地に進出した縄文人の痕跡を見ることができる。前期後半段階には松ノ木田遺跡において集落が開示、この段階で中核的な集落の形成が認められる。なお、松ノ木田遺跡では前期後半、中期中葉、後期の集落が検出された。また、檀田遺跡では中期の集落が、吉田古屋敷遺跡、吉田四ツ屋遺跡（23）では後期の集落が検出されており、継続的に集落が営まれている様子が看取される。

弥生時代前期の遺跡は、浅川扇状地では現在のところ確認されていない。中期後半になると縄文時代と同じく扇頂部や扇中部に集落が形成されるほか、扇状地の両翼でも集落が確認されている。檀田遺跡では該期の竪穴住居跡が41軒検出されており、拠点的な集落と考えられる。後期前半の集落は、前後の時期に比べて数が少ないが、吉田式土器の標識遺跡である吉田高校グラウンド遺跡（19）や、二ツ宮遺跡（31）、本村南沖遺跡（7）で同時期の集落跡が検出されている。後期後半は本村東沖遺跡（6）や下宇木遺跡（9）、長野女子高校校庭遺跡（11）、中越遺跡（24）等扇状地西側にも集落の分布が見られるようになる。後期後半には千曲川流域では水田開発が発展して大規模集落が形成されているが、浅川扇状地においても遺跡数、竪穴住居数共に増加しており、集落の拡大傾向が認められる。

古墳時代には遺跡数はさらに増加し、これまで集落が形成されていた扇中部に加え、平林東沖遺跡（35）が位置する扇端部まで遺跡の分布が見られるようになる。中期から後期にかけての遺跡が主体であるが、檀田遺跡、桐原宮北遺跡（3）、桐原牧野遺跡（4）、吉田四ツ屋遺跡、返目遺跡（5）等で前期の遺構が検出されている。中期の集落遺跡では本村東沖遺跡が挙げられる。51軒の竪穴住居跡が検出された該期の拠点集落であり、多量の古式須恵器のほか子持ち勾玉や土鈴などの祭祀遺物が出土した。地附山山頂の地附山古墳群と同時期に存続した集落であり、古墳の造営に関わった人々の居住域と考えられる。後期は小規模な集落が点在する傾向である。三輪遺跡、長野女子高校校庭遺跡、桐原宮西遺跡（2）、吉田町東遺跡（20）、吉田古屋敷遺跡、吉田四ツ屋遺跡等で該期の集落が検出された。また、徳間柳田遺跡（28）や本堀遺跡（30）、二ツ宮遺跡でも同時期の集落が見つかっている。檀田遺跡では90軒におよぶ竪穴住居跡が検出されており、後期の拠点的な大集落が形成されていたとみられる。

奈良・平安時代の集落は扇状地全体に分布が見られる。古墳時代後期に引き続き、小規模な集落が多数を占めるが、徳間柳田遺跡や二ツ宮遺跡、桐原宮北遺跡では比較的規模が大きな集落が形成されている。また、稲添遺跡（29）や本堀遺跡では平安時代の瓦塔や7世紀代の軒瓦が出土しており、仏教関連遺物が多く認められる。

中世居館・城館は15箇所が知られており、三輪遺跡近隣では相ノ木城跡（40）、押鐘城跡（41）、桐原要害（高野氏居館跡・39）がある。このうち桐原要害では発掘調査が実施され、掘立柱建物跡や柵列、堀跡が見つかった。また、他の遺跡でも溝跡や土坑を中心とした中世の遺構や、輸入陶磁器や五輪塔等の遺物が見ついている。



- |          |               |               |               |                     |
|----------|---------------|---------------|---------------|---------------------|
| 1 調査地    | 10 下字木B遺跡     | 19 吉田高校グランド遺跡 | 28 徳間柳田遺跡     | 37 地附山古墳群(7基)       |
| 2 桐原宮西遺跡 | 11 長野女子高校校庭遺跡 | 20 吉田町東遺跡     | 29 稲添遺跡       | 38 神楽橋遺跡            |
| 3 桐原宮北遺跡 | 12 本郷前遺跡      | 21 吉田古屋敷遺跡    | 30 本堀遺跡       | 39 桐原要害<br>(高野氏居館跡) |
| 4 桐原牧野遺跡 | 13 檀田遺跡       | 22 辰巳池遺跡      | 31 ニツ宮遺跡      | 40 相ノ木城跡            |
| 5 返目遺跡   | 14 浅川端遺跡      | 23 吉田四ツ屋遺跡    | 32 権現堂遺跡      | 41 押鐘城跡             |
| 6 本村東沖遺跡 | 15 浅川西条遺跡     | 24 中越遺跡       | 33 樋爪遺跡       | 42 吉田町遺跡            |
| 7 本村南沖遺跡 | 16 小板屋遺跡      | 25 徳間榎田遺跡     | 34 天神木遺跡      | 43 幼勉稚園遺跡           |
| 8 美和公園遺跡 | 17 松ノ木田遺跡     | 26 徳間中南遺跡     | 35 平林東沖遺跡     |                     |
| 9 下字木遺跡  | 18 押鐘遺跡       | 27 徳間番場遺跡     | 36 湯谷東古墳群(7基) |                     |

図8 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

### 第3章 調査成果

#### 第1節 調査の概要

事業予定地では全域に埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いことから、開発により埋蔵文化財が影響を受ける730㎡を発掘調査の対象とした。この中で、調査区北西部は排土を搬出する重機の作業スペースとして調査範囲から除外した。作業スペース等を除いた実質調査面積は580㎡である。

調査地は北西から南東方向に下る緩斜面地であり、遺構検出面の標高は調査区南辺が約30cm低くなる。地表から遺構検出面までの深さは、調査区北辺で約30～40cm、南辺で約50～100cmを測る。

調査区の基本土層について図9に、また調査区南壁で観察した土層について図10に示した。調査区内において、遺物包含層は表土層下に堆積しているが、調査区南側では表土層下に円礫を含む暗黒色粘質土（図10・Ⅱ-1～Ⅱ-5）の堆積が認められた。この層はSB17・18の覆土と遺物包含層を削り、さらにSB11・12の上層に堆積することから、平安時代以降に流入、堆積したものと推定される。特に調査区中央部（SB17～20近辺）で厚く堆積する傾向が認められた。

調査で検出した遺構は、竪穴住居跡18軒、溝跡1条、土坑5基、小穴2基である。調査区北側中央から北西側は攪乱範囲が広く、遺構を検出できなかったが、その他の範囲には比較的密に遺構が展開している。竪穴住居跡の時期は古墳時代後期と平安時代に大別でき、内訳は古墳時代後期11軒、平安時代7軒ある。古墳時代後期の竪穴住居跡のうち、8軒でカマド跡を検出した。いずれも破却されており、住居廃絶後に意図的に破壊したものと推定される。平安時代の竪穴住居跡は全体を検出し得たものが少ない。溝跡および土坑は平安時代以降に構築されたものが主体である。

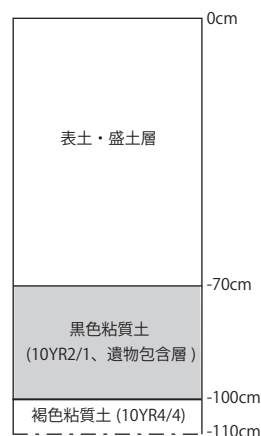


図9 基本土層柱状図

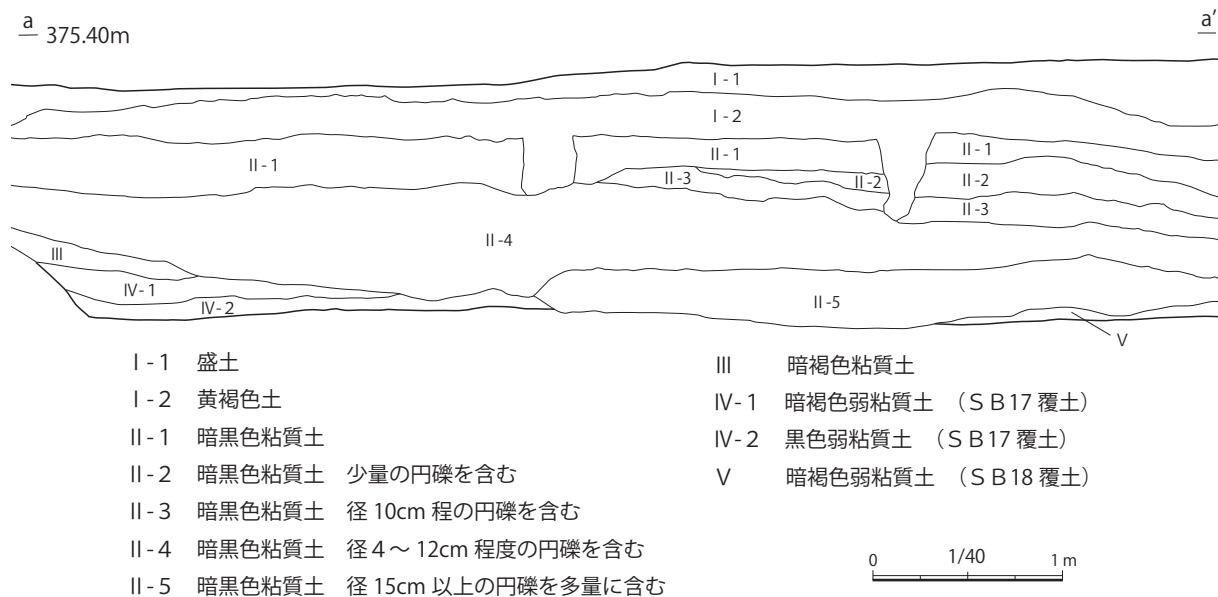


図10 調査区南壁土層堆積状況図

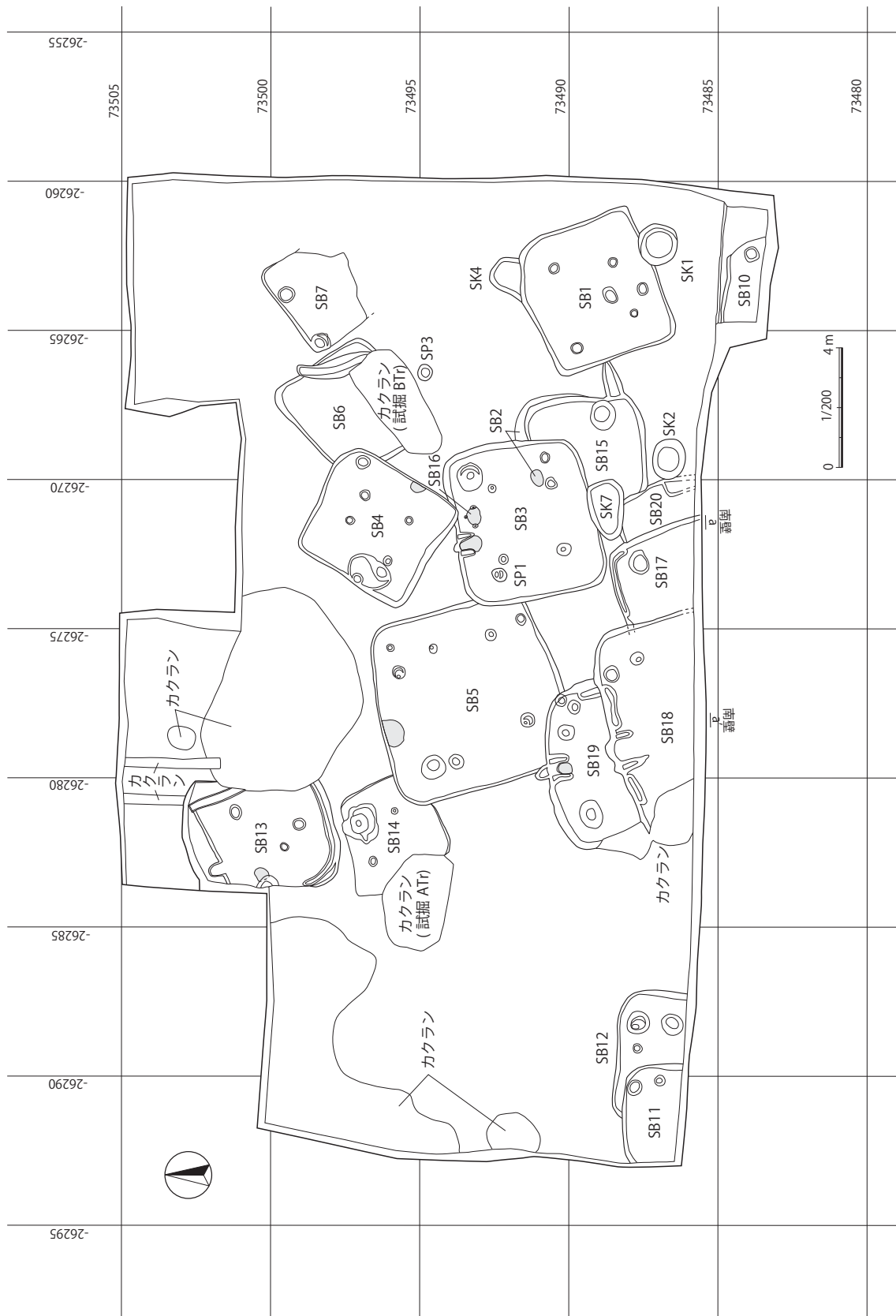


図11 調査区全体図 (1/200)

## 第2節 遺構と遺物

調査で検出した遺構に関しては、基礎情報を一覧表（表1）にまとめ、竪穴住居跡および特徴的な遺構について個別遺構図を提示した。

出土した遺物は、土器、陶器、土製品、石製品、鉄製品で、土器総量は130,722.4gを測る。このうち、134点について図化を実施した。土器は、種類ごとに分類したのち遺物の口縁、底部あるいは器種の特定が可能な部分が1/2以上残存する個体を抽出し、図化した。土製品、石製品については、その機能や用途が明確なものを中心に図化している。また、鉄製品については遺物写真の他X線写真を掲載した。掲載した遺物には通し番号を付し、観察所見を観察表（表2）にまとめた。以下、遺構ごとに詳細を述べる。なお遺構から出土した遺物は混入したものも含まれるが、各遺構で器種、種類によって配置している。

### 1 竪穴住居跡

#### 【SB1】

調査区南東で検出した。SB15、SK1・4と重複する。重複する遺構の中では最も古い。遺構の規模は4.6m×4.7mで、検出面までの深さは約21cm、平面形は隅丸方形を呈する。遺構に伴うピットは5基を検出した。主柱穴はP1～P4である。また、北壁中央部分で土器や角礫がまとまって出土した。破却されたカマドの可能性が考えられるが、火床と判断できる被熱面や炭化物等は検出されなかった。

出土した土器は16,922gで、本調査で検出した遺構の中では最多である。このうち、15点（1～15）を図化した。1～3はロクロ成形、底部回転糸切の土師器杯である。4・5は内面に黒色処理を行った杯である。5は床面から約10cm浮いた位置から出土しており、体部下端に「×」が焼成前に刻書されている。6～8は土師器の高台付杯である。器形が復元できる6・8は杯部の器高が比較的高く、内湾して立ち上がり、高台はハ字状をなす。7の底部切り離しはヘラ切の可能性はあるが、明瞭な痕跡を確認できなかった。なお、6は内面を黒色処理している。9は須恵器の高台付杯で、精良な胎土である。体部は鋭い稜を持って立ち上がり、ゆるく外反している。底部がほとんど残存していないが、底部調整は回転ケズリと見られる。12～15は7～8世紀代の甕である。12は内外面をハケ調整し、13～15は外面をケズリ調整、内面をナデ調整する。器形はいずれも長胴形を呈すると推測される。出土土器には古墳時代後期に属するものと平安時代中期に属するものが認められる。覆土から床直上まで両者が混在している状態であったが、カマド周辺や床直上出土遺物の量を鑑みて、本遺構の時期は古墳時代後期と判断した。

#### 【SB2】

調査区中央で検出した。SB3の北東部上面で、床面もしくは床下の一部と推測される部分とカマドの焼土部分が検出され、東から南部にかけて住居壁が確認された。SB3・15・16と重複し、重複する遺構の中では最も新しい。当初SB3の覆土上層で土が他より締まった部分が認められたものの、SB2の存在を把握できずSB3および15の調査を進めてしまったことから、検出したのは遺構の一部のみである。床面範囲を明確にし得なかったため、遺構図には住居上端のみ図示している。遺構の規模は推定で東西4m、南北2.5m以上となる。平面形は不明だが、隅丸方形を呈す可能性が高い。

出土遺物は、土器8,681gである。このうち灰釉陶器（19）は黒色土器高台付杯（17）とともに本遺構の遺物

とみられる。19は灰釉陶器の皿で、内面底部に重ね焼き痕を有する。三日月高台にはシャープさがなく、漬け掛け施釉で、底部回転ケズリが観察される。折戸53号窯（大原2号窯）前半期の製品と判断し、遺構の所属時期は10世紀前半と捉えた。須恵器杯蓋（16）は胎土がやや粗な赤灰色、外面に降灰を受けており、返りを持つ。7世紀第3四半期に属する。17は被熱によるものか、黒色処理が部分的に消失している。土師器甕（18）は胴部下端にハケののちナデを施していることがわかるが、小片であるため詳細は不明である。

出土遺物から、遺構の時期は平安時代中期頃と推定される。

### 【SB3】

調査区南東で検出した。南東部は平安時代のSB2・15が重複し、北部も古墳時代後期のSB4・5と重複している。住居北壁の一部はSB4によって掘り込まれる。この他、北西隅にはSP1が構築されていた。なお、SB15はSB3を掘り込んで構築されているが、SB3の調査を先行してしまったため、SB15覆土の一部をSB3調査時に掘削している。遺構の規模は4.7m×5.4mを測り、検出面から床面までの深さは約28cmである。平面形は隅丸方形を呈する。本遺構内部には入れ子状にSB16が確認されており、建て替えあるいは住居拡張の可能性が想定される。本遺構に伴うピットは6基を確認した。このうち、支柱穴はP3～P6と考えられる。カマドは北壁のやや西よりに構築されており、火床および両袖を検出した。また、左袖端部から角礫が1点検出された。石材全体の約1/2程度が埋め込まれており、袖石の一部と考えられる。

出土遺物は土器が13,103gと多く、12点（20～31）を掲載した。須恵器蓋杯（21）は床面直上で出土した。立ち上がりが短く内傾して、受部は非常に短い。底部の手持ちケズリ、体部下端の回転ケズリは粗雑である。TK217の古段階、6世紀末から7世紀初めのものとみられる。このほか、床面で出土したのは土師器甕（25・28）、甑（26）、床面直上からはハケ甕（30）、カマドからはハケ甕（29）・ケズリ甕（31）が出土した。28の胴部にはススが付着している。30は外面胴部ハケ整形ののち比較的丁寧なナデが施されており、31は内面に明瞭な輪積み痕を観察できる。長胴甕は胴部の張りが弱く、口縁部は短く外反している。須恵器底部破片（22）は平安時代のもので、外面体部に墨痕が観察された。

床面および床直上出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

### 【SB4】

調査区中央で検出した。SB3・6、SK5と重複する。SB3・6より新しく、SK5より古い。遺構の規模は4.1m×4.5m、検出面から床面までの深さは約10cmと極めて浅い。平面形は隅丸方形を呈する。支柱穴はP1～P4である。本調査で検出された住居跡とは主軸方位が異なり、南西-北東方向に主軸をとる。住居南東壁中央にカマドの残存部と見られる焼土範囲を検出した。袖や煙道等の上部構築物は残存していない。また、焼土の周囲からは石材が検出された。検出した石材の中には、被熱痕が認められるものが数点あり、これらはカマド構築材と考えられる。

出土遺物は、土器7,900gである。床面からの出土は土師器甕（38・42）で、38は球胴のミガキ甕である。42は胴部の張りが弱い長胴でケズリ調整の甕で、外面胴部中位にススの付着がみられる。32～37、39～41は覆土出土の遺物である。須恵器杯蓋（32）は返りがあり、天井部は回転ケズリされている。紐の形は丸みを帯びてやや扁平である。胎土はやや粗いが器壁は薄い。黒色土器杯（33）で外面体部下半はケズリののちミガキ、上半はミガキを行う。黒色土器杯（34）は丸底で、内面底部に3本と2本の直線を直交させた線刻が観察される。焼成前のものとみられるが、意味は不明である。出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代後期（7世紀四半期）と

考えられる。

#### 【SB5】

調査区中央で検出した。SB3・14・19と重複し、遺構南東部をSB3、北東部をSB14、南西部をSB19にそれぞれ掘り込まれている。重複する遺構の中では最も古いものと考えられる。遺構の規模は6.2m×6.2mで、本調査の竪穴住居跡では最大である。検出面から床面までの深さは約17cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。主柱穴はP2、P3、P5、P6の4基である。この他、カマドの両脇、南壁際などにピット5基が検出された。カマドは北壁やや西よりに敷設されており、火床および構築材と見られる石材を検出した。

出土遺物は、土器11,958gである。床面および床直上出土の土器は黒色土器高杯(46)と土師器甕(48)、カマド出土の土器は黒色土器高杯(47)、土師器甕(50)である。46の杯部は丸底で浅く内湾するタイプ、47は杯下部に弱い稜を作り、内湾気味に立ち上がるタイプである。48・50はハケ調整の土師器甕で短く外反する口縁に最大径がある。出土した土器の様相から、遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

#### 【SB6】

調査区北東で検出した。SB4、SD1と重複し、南部は試掘Bトレンチにより削平される。SB4・SD1の方が新しく、遺構北西部をSB4に、南東部をSD1に掘り込まれている。遺構の規模は3.7m×4.2mで、検出面から床面までの深さは約20cmである。平面形は隅丸方形を呈する。ピットは検出されていない。床面は他の竪穴住居跡に比べてややしまりが弱い。また、住居北壁中央部分に遺物集中箇所が1箇所認められた。検出位置から、カマドの可能性を考慮して調査を進めたが、焼土や炭化物は検出されなかった。

出土遺物は、土器3,712gおよび石製品である。遺物集中箇所から出土した土師器甕(55・56)はハケ調整の甕である。55は長く外傾する口縁で、56は胴中位に最大径をもつと推測される。6世紀後半～7世紀初頭の特徴を有しており、共伴する54も該期の直口縁ミガキ調整甕である。覆土出土の土師器杯(51)もこの時期に新たに組成に加わる平底の土師器杯とみられる。石製品は凹石(134)が1点、遺物集中箇所から出土した。遺構の時期は古墳時代後期(6世紀後半～7世紀初頭頃)と考えられる。

#### 【SB7】

調査区東で検出した。遺構南側は床面直上が検出面となり、住居壁と床面の一部を重機で削平している。遺構の残存規模は2.8m×3.4mで、検出面から床面までの深さは約9cmと極めて浅い。平面形は隅丸方形と推定される。遺構に伴うピットは北西壁中央付近と北西隅の2箇所を検出した。2基とも浅く、用途に関しては判別し難い。

出土遺物は、土器3,196.4gである。土師器杯(57～62)、黒色土器高台付杯(63)を掲載した。土師器杯は全体として成整形が粗雑で、底形が小さく、器壁が薄いという特徴が窺える。黒色土器杯の比率が低く、須恵器供膳具が共伴しないことから、平安時代中期10世紀前半頃の遺構と判断される。

#### 【SB10】

調査区南東端で検出した。床面直上が検出面となったため、住居床面と住居壁の一部を検出したのみである。遺構の北東部を検出したが、遺構の大部分は調査区外となる。平面形は不明だが、遺構の残存規模は1.2m×2.9mを確認した。また、北東隅にピット1基を検出した。

出土遺物は土器が700gと僅少である。土器は土師器および須恵器が主体であるが、いずれも小破片で掲載できる遺物はない。遺構の時期を決定し得る資料は乏しいが、出土した土器の様相からは平安時代に属する可能性が高いと判断する。

#### 【SB11】

調査区南西隅で検出した。遺構の南・西側が調査区外となるため、検出範囲は遺構の一部に留まる。検出範囲における遺構の規模は1.9m×3.4mで、検出面から床面までの深さは約37cmを測る。平面形は隅丸方形と推測される。遺構に属するピットは2基を検出した。P2の周辺で、少量の焼土と炭化物が検出されたが、カマドの痕跡は確認されなかった。また、重複するSB12との新旧関係が平面的には明確に判断できなかったことから、南壁に沿ってトレンチを設定し土層観察を行った。土層の堆積状況からSB11がSB12を切って構築されていると判断したが、SB11、SB12共に平安時代に属しており、出土遺物をもって新旧関係は判断できない。

出土遺物は、土器が6,806gである。須恵器杯(64)、土師器甕(65・66)を掲載した。65は床面から出土したロクロ成形の甕で、やや小型である。66は覆土から出土した。長胴に近い器形で、底部には木葉痕が見られる。通常の甕とは様相がやや異なり、煮炊具以外の用途で使われた可能性も考えられる。なお、SB11・12のトレンチ内から出土した遺物に関しては各遺構とは別に実測図を掲載し、掲載した遺物の詳細に関しては本節の5に記載している。

#### 【SB12】

調査区南西隅で検出した。SB11と重複し、遺構の南側が調査区外となる。切り合い関係において、土層観察によりSB11が新しいと判断した。検出範囲における遺構の規模は2.2m×4.4mで、重複するSB11よりも浅く、検出面から床面までの深さは約14cmである。平面形は隅丸方形と推測される。遺構に伴うピットは3基確認された。このうち、P1は柱穴の可能性が考えられる。

出土遺物は土器が2,512gである。黒色土器杯(68)、土師器杯(69)、土師器甕(70)はいずれもP1から出土した。68は被熱が認められる。69は大型で、雲母粒を多量に含む。70は砲弾型の丸底タイプであり、ロクロ成形のち体部下半にケズリと平行タタキ調整をしている。出土土器の様相から、遺構の時期は平安時代中期を中心とした時期と考えられる。

#### 【SB13】

調査区中央北で検出した。遺構北西隅が調査区外となり、南東側を攪乱に切られる。遺構の規模は4.2m×4.1mで、検出面から床面までの深さは約21cmである。平面形は隅丸方形を呈する。遺構に伴うピットは4基検出されたが、支柱穴と捉えることは出来なかった。カマドは住居北壁中央に位置し、火床と見られる被熱痕および焼土、炭化物を検出した。袖や構築材等は残存していない。壁溝は住居南西から南東にかけて確認した。

出土遺物は土器が6,930gである。土師器鉢(79)、土師器甕(81)は覆土から出土している。P1出土の土師器甕(80)は外面下部をケズリ調整、胴部をミガキ調整している。底部孔の内面は指圧痕が残る。これらの器形の特徴から、遺構の時期は古墳時代後期の範疇のものとする。

#### 【SB14】

調査区中央北で検出された。SB5を切って構築されており、SB5より新しい。遺構西側は試掘Aトレンチに



より削平されている。床面直上が検出面となったため、住居壁は部分的に残存するのみである。遺構の規模は3.3m×3.8mを測る。平面形はやや歪みのある隅丸方形を呈する。遺構に伴うピットは3基検出したが、支柱穴と捉えることはできなかった。

出土遺物は土器3,327gおよび鉄製品である。黒色土器杯(82)、須恵器杯(83)は床面直上、土師器甕(85)はP1から出土した。82・83はいずれも成整形が粗雑で、83は胎土も粗い。85は口縁が稜をなして内湾し口唇部が強く外反している。未掲載遺物には床面直上出土の灰釉陶器碗と緑釉陶器皿がある。灰釉陶器は口縁が明瞭に外反するものである。緑釉陶器は淡黄色で、胎土は灰白色でやや軟質である。また鉄製の刀子が覆土中とP1から出土した。P1出土の135は2つに割れてはいたが、15.8cmと長い。遺構の時期は、遺物の様相から概ね平安時代中期(9世紀中～後半頃)と推定する。

#### 【SB15】

調査区南東で検出された。SB1・2・3・16・20、SK7と重複する。SB3・16・20より新しく、SB1・2、SK7より古いと判断される。遺構の上部をSB2に削平されており、全容は不明であるが、4.0m×3.4mの範囲で残存を確認した。竪穴住居内ではカマド跡は検出できなかったが、遺構南東部の住居壁外に溝状の落込みが検出され、灰が確認されたことからカマドの煙道の可能性も考えられる。遺構内においてピット1基が検出された。

出土遺物は、土器3,830gおよび鉄製品である。掲載した遺物は土製品を除きすべて覆土中から出土した。土師器甕(91)は内面黒色で内外面に丁寧なミガキを施す。86～88は黒色土器である。鉄製の刀子(137)は長さ8.7cmだが折れている。土製品(131)は韃の羽口の小片である。遺物の様相から概ね平安時代中期(9世紀中～後半)の遺構と推定する。

#### 【SB16】

調査区南東で検出した。SB2・3・15と重複する。SB3の東壁、南北壁の一部を共有しているため、SB3の拡張以前の住居跡と推測される。重複するSB2・15よりも古い。検出面から床面までの深さは約37cmを測るが、その他遺構の規模、平面形など詳細は不明である。カマドは遺構北壁中央に位置し、火床および構築材の抜き取り痕と見られるピットを検出した。住居拡張時に作り替えを行った可能性が考えられる。

出土遺物は土器が30gと少なく、いずれも小破片のため図化することができなかった。遺構の時期を判断し得る遺物は無いが、SB3の拡張以前の住居跡とすれば古墳時代後期の遺構と判断されよう。

#### 【SB17】

調査区中央南で検出した。遺構の南側が調査区外となる。SB18・20と重複し、遺構西側をSB18に掘り込まれている。検出範囲における遺構の規模は3.1m×2.9mで、検出面から床面までの深さは約20cmを測る。平面形は隅丸方形を呈すと推定される。壁溝は北東隅から北壁で部分的に確認された。遺構に伴うピットは1基検出した。

出土遺物は、土器1,313gおよび石製品である。手づくね土器(94)と土師器甕(95)を掲載した。94は内面黒色で手づくね成形の小型の鉢である。95は平底の土師器甕でケズリ調整後にナデを行う。石製品(132・133)は凹石で、トレンチ2内から出土した。出土遺物の様相より、遺構の時期は古墳時代後期と推定される。

SB17、18、20は遺構の平面プランや切り合い関係が不明瞭だったため、調査区南壁に沿ってトレンチを掘削し、土層観察を行った。この結果、トレンチ部分においてはSB17および18の覆土と住居壁を削って円礫を含む暗黒色粘質土が堆積していることが判明した(図10参照)。なお、このトレンチ掘削の際には、遺物を一括で取

り上げている。これらの遺物に関しては、SB17・18の覆土から出土した遺物として各遺構とは別に実測図を掲載し、詳細に関しては本節の5に記述した。

#### 【SB18】

調査区中央南で検出した。遺構の南側が調査区外となる他、西側を攪乱によって掘り込まれている。SB17・19と重複し、構築順はSB19、17、18となる。検出範囲における遺構の規模は4.0m×6.9mで、検出面から床面までの深さは約42cmと深い。平面形は隅丸方形と推測される。東西長(6.9m)をもって遺構規模と仮定すれば、本調査では最大の住居跡となる。遺構に伴うピットは2基検出した。P1は柱穴と考えられる。カマドは北壁中央に位置し、両袖が残存している。また、カマド脇には壁溝が部分的に設けられていた。

出土遺物は、土器が8,952gである。須恵器杯蓋(96)は床直上出土である。短い返りを持ち、口径11.1cmと小型の笠形で、扁平な宝珠形の紐を持つ。外面は2/3以上が粗雑な回転ケズリ調整である。胎土は長石粒を多く含む。床面直上の高杯(100)、床面出土の高杯(99)と共伴する。100は紡錘状の透かしが2ヶ所ある。出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代後期(7世紀中葉)と判断した。

#### 【SB19】

調査区中央南で検出した。SB5・18と重複し、構築順はSB5、19、18となる。遺構南側はSB18に、西側の一部を攪乱によって掘り込まれている。検出範囲における遺構の規模は2.8m×5.4mで、検出面から床面までの深さは約42cmと深い。平面形は隅丸方形と推測される。遺構に伴うピットは3基検出したが、いずれも浅く柱穴と捉えることは難しい。カマドは北壁中央に位置し、両袖と煙道の一部および火床を検出した。東壁には部分的に壁溝が検出された。

出土遺物は、土器3,454gである。図示したのは土師器甕(107・108)で、107はカマドから出土しており、外面の一部にハケ調整が認められる。108は覆土からの出土で、外面にハケ・ミガキ調整をしている。出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代後期頃と判断する。

#### 【SB20】

調査区中央南で検出した。遺構の南側が調査区外であり、西側は重複するSB17に掘り込まれているため、ごく一部の検出となっている。検出範囲における遺構の規模は2.6m×1.5mで、検出面から床面までの深さは約7cmと極めて浅い。平面形は隅丸方形を呈すと推測される。

出土遺物は、土器が665gである。図化したのは黒色土器高杯(109)、土師器甕(110)で、いずれも床面直上出土である。土師器甕は口縁が外反し、最大径が胴部中位にあるケズリ調整の甕で、6世紀後半～7世紀初めの特徴を有する。SB20は遺構の時期を特定する資料に乏しいが、出土遺物の様相から古墳時代後期に属する可能性が高い。

## 2 溝跡

#### 【SD1】

調査区北東で検出した。幅70cm、全長2.6mで深さは20cmである。SB6と重複する。

出土遺物は、土器30gと僅少であり、須恵器横瓶とみられる小片のみで、図化していない。遺構の時期は平安時代以降と推定される。

### 3 土坑

#### 【SK 1】

調査区南東で検出した。径1.4m、深さ約28cmの円形を呈する。重複するSB1より新しい。

出土遺物は土器が184gと少なく、図示できるものはない。平安時代以降の掘削と推定される。

#### 【SK 2】

調査区中央南で検出した。径1.4m×1.1m、深さ約28cmの楕円形を呈する。

出土遺物は土器が1,042gである。須恵器鉢（111）、黒色土器・土師器の高杯（112・113）を掲載した。111は底部外面に窯印の可能性があるヘラ傷が認められる。出土遺物から遺構の時期は古墳時代後期（7世紀中葉）に位置付けられるものと判断する。

#### 【SK 4】

調査区南東で検出した。SB1と重複する。深さは約6cmと浅く、検出範囲における規模は1.4m×1.3mである。平面形は不整形と呈すと考えられるが、遺構の全形は不明である。

出土遺物は土器が347gである。底部回転糸切の土師器杯（114）と黒色土器高台付杯（115）を図化した。出土遺物の様相から、平安時代中期頃の遺構と判断する。

#### 【SK 5】

調査区中央で検出した。長軸1.5m、短軸1.1m、深さ約15cmの楕円形を呈する。出土遺物はないため詳細は不明であるが、重複するSB4より新しいため、古墳時代後期以降の掘削と推定される。

#### 【SK 7】

調査区中央南で検出した。SB15と重複する。長軸2m、短軸1.2m、深さ約28cmの不整な楕円形を呈する。遺構底部に炭化物が層状に堆積している様子が観察されたほか、覆土には焼土ブロックと炭化物が多量に含まれていた。燃烧行為を伴う施設と考えられる。可能性としては小鍛冶が挙げられるが、鉄滓は検出されなかった。

出土遺物は土器が326gである。遺物が小片であるため時期は不明であるが、遺構の重複関係から平安時代の所産と推定される。

### 4 小穴

#### 【SP 1】

調査区南東で検出した。SB3を掘り込んで構築される。直径50cmの円形を呈し、深さは約22cmである。出土遺物は土器が28gと僅少で図示し得るものはない。遺構の時期など詳細は不明である。

#### 【SP 3】

調査区北東で検出した。直径50cmの円形を呈し、深さは約24cmである。出土遺物は土器が3gと僅少で図示し得るものはない。遺構の時期など詳細は不明である。

## 5 そのほか

ここでは包含層・検出面および複数遺構にまたがる遺物について述べる。

### 【SB11・12トレンチ出土遺物】

SB11・12のトレンチからは、土師器杯（71・72）、土師器高台付杯（73）、灰釉陶器皿（74）、緑釉陶器段皿（75）が出土している。71は口縁内面の一部に油煙が付着しており、灯明皿として使用した可能性がある。74は三角高台でシャープさに欠け、漬け掛け施釉、底部回転ケズリが観察される。折戸53号窯（大原2号窯）前半期の製品と判断した。75は口縁部小片である。釉はオリーブ灰色で胎土は灰色を呈し、堅緻で白色粒を含む。これらの遺物は平安時代中期（10世紀前半）に属すると判断した。

### 【SB17・18トレンチ出土遺物】

SB17・18トレンチからは土師器杯（101）、黒色土器高杯（102・103）、須恵器壺（104）、土師器甌（105）、土師器甕（106）が出土している。101は内外面をミガキ調整し、底部が丸底となる。102は高杯の杯部、103は脚部で、いずれも杯部の内面を黒色処理している。106はロクロ調整の甕で、口縁端部を丸く仕上げている。101～103は7世紀中葉、104・106は9世紀後半頃の遺物と考える。

### 【包含層・検出面出土遺物】

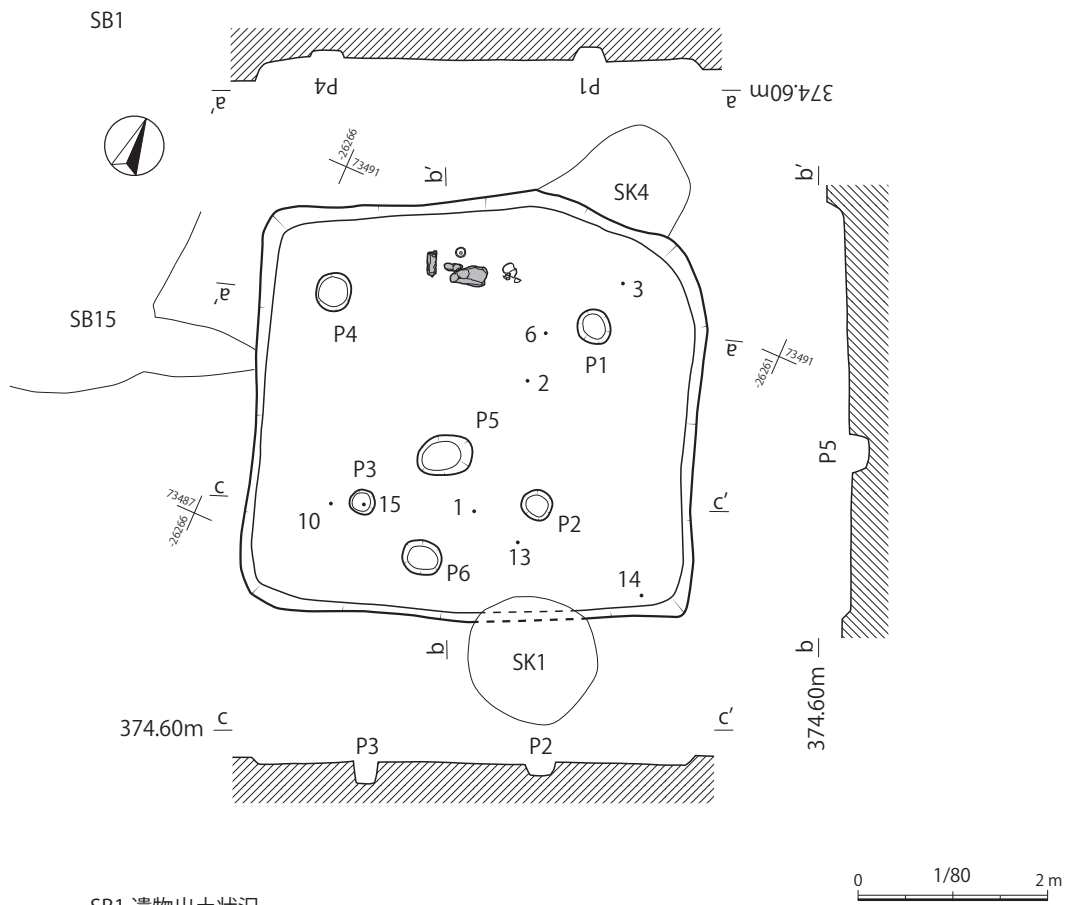
包含層出土遺物は土器が520g、検出面出土遺物は土器が22,939gである。包含層出土ではかわらけ（116）および高台付杯（119）を図示した。117～118、120～129は検出面出土の遺物である。この中で、須恵器杯蓋（117）、黒色土器杯（122）、須恵器杯（124）、黒色土器高杯（127）にはヘラ書きが認められる。117は、ヘラ記号とみられる「×」が外面天井部にヘラ書きされる。122は杯外面体部に焼成後線刻が観察される。124は須恵器杯外面底部に焼成前線刻「卍」、127は杯部内面底部に線刻「×」がみられるが、焼成前の線刻かどうかは不明である。125は外面に墨痕が認められる。黒色土器杯（121）は、底部を回転糸切によって切り離したのち、一部をヘラケズリによって調整する。また、手指による簡易な調整痕が見られた。検出面からはこの他に土製円板（130）、鉄製刀子（138）が出土している。

表1 遺構一覧

遺構名	時期	遺構		出土土器			その他 出土遺物
		形態・規模(m)	備考	総量(g)	備考	報告数	
S B 1	古墳時代後期	隅丸方形 4.6×4.7	S B 15・S K 1・4が重複	16,992		15	
S B 2	平安時代	隅丸方形?	S B 3・15・16に重複	8,681		4	
S B 3	古墳時代後期	隅丸方形 4.7×5.4	S B 2・15・S K 7・S P 1が重複、S B 16に重複、S B 4・5と重複	13,103		12	
S B 4	古墳時代後期	隅丸方形 4.1×4.5	S K 5が重複、S B 3・6に重複	7,900		11	
S B 5	古墳時代後期	隅丸方形 6.2×6.2	S B 3・14・19が重複	11,958		8	
S B 6	古墳時代後期	隅丸方形 3.7×4.2	S B 4・S D 1が重複	3,712		6	凹石
S B 7	平安時代	隅丸方形? (2.8)×(3.4)		3,196.4		7	
S B 8 (欠番)	—	—		—		—	
S B 9 (欠番)	—	—		—		—	
S B 10	平安時代	隅丸方形? (1.2)×(2.9)		700		0	
S B 11	平安時代	隅丸方形? (1.9)×(3.4)	S B 12と重複	6,806	S B 12一部含む	9	
S B 12	平安時代	隅丸方形? (2.2)×(4.4)	S B 11と重複	2,512		3	
S B 13	古墳時代後期	隅丸方形 4.2×(4.1)		6,930		6	
S B 14	平安時代	隅丸方形? (3.3)×(3.8)	S B 5に重複	3,327		4	刀子2ヶ
S B 15	平安時代	隅丸方形 4.0×(3.4)	S B 2・S K 7が重複、S B 1・3・16・20に重複	3,830		8	羽口片・刀子
S B 16	古墳時代後期	不明	S B 3が重複	30		0	
S B 17	古墳時代後期	隅丸方形? (3.1)×(2.9)	S B 18が重複、S B 20と重複	1,313		2	
S B 18	古墳時代後期	隅丸方形? (4.0)×(6.9)	S B 17・19に重複	8,952	S B 17一部含む	11	凹石2ヶ
S B 19	古墳時代後期	隅丸方形? (2.8)×(5.4)	S B 18が重複、S B 5と重複	3,454		2	
S B 20	古墳時代後期	隅丸方形? (2.6)×(1.5)	S B 15・S K 2・7が重複、S B 17と重複	665		2	
S D 1	平安時代以降	全長(2.6)幅0.7	S B 6に重複	30		0	
S D 2 (欠番)	—	—		—		—	
S K 1	平安時代以降	円形 1.4	S B 1に重複	184		0	
S K 2	古墳時代後期	楕円形 1.4×1.1	S B 20に重複	1,042		3	
S K 3 (欠番)	—	—		—		—	
S K 4	平安時代	不整形 (1.3)×1.4	S B 1に重複	347		2	
S K 5	平安時代以降	楕円形 1.5×(1.1)	S B 4に重複	0		0	
S K 6 (欠番)	—	—	S B 15と統合	—		—	
S K 7	平安時代	楕円形 2.0×1.2	S B 3・15・20に重複	326		0	
S P 1	時期不明	円形 0.5	S B 3に重複	28		0	
S P 2 (欠番)	—	—		—		—	
S P 3	時期不明	円形 0.5		3		0	
検出面				22,939		12	円板・刀子
包含層				520		2	
その他				1,242		0	

総合計 130,722.4

129



SB1 遺物出土状況

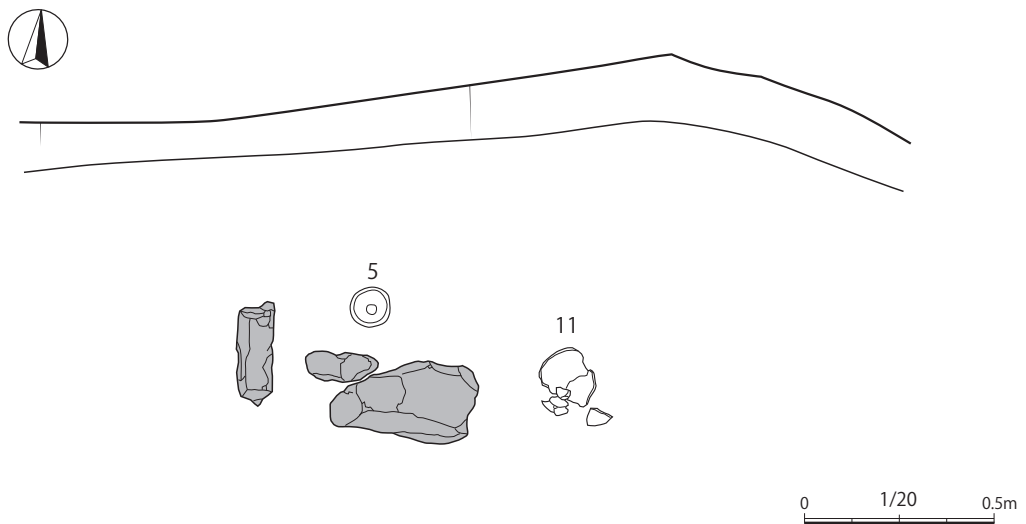
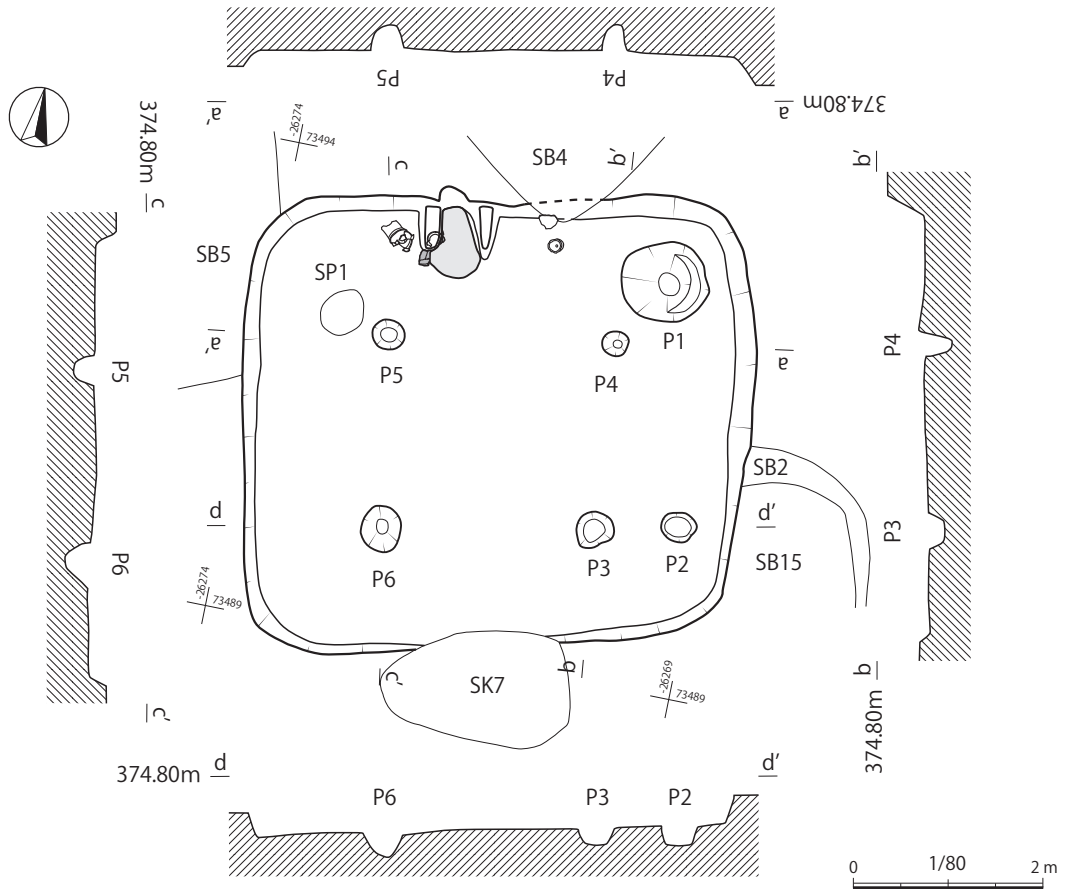


図12 遺構実測図1 (SB1)

SB3



SB3 カマド

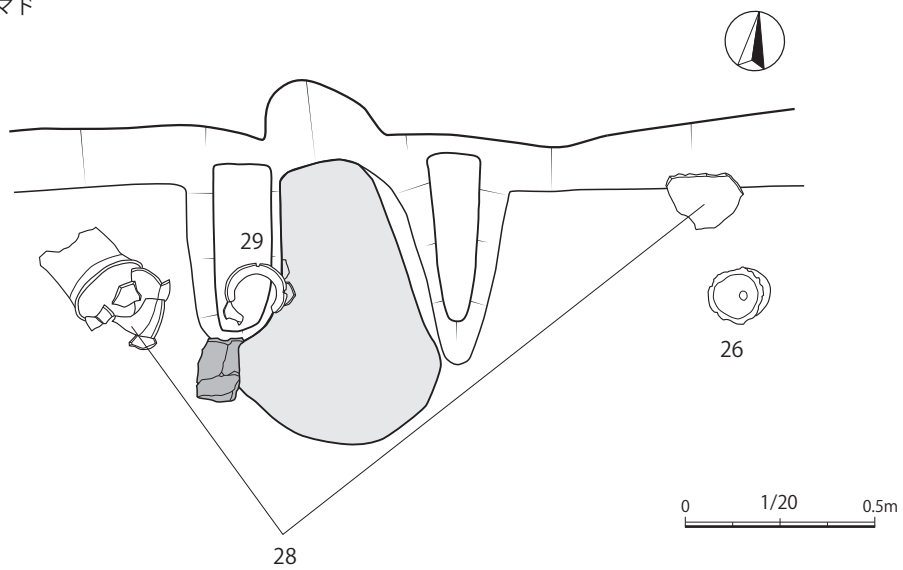
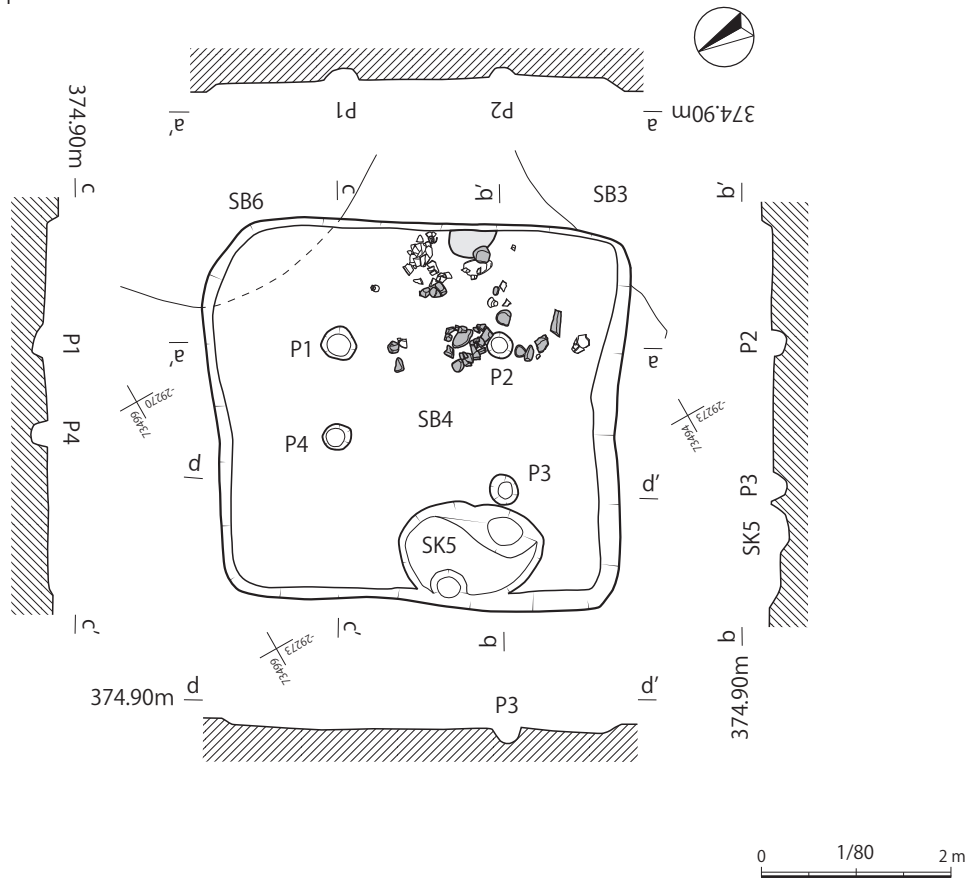


図13 遺構実測図2 (SB3)

SB4



SB4 遺物出土状況

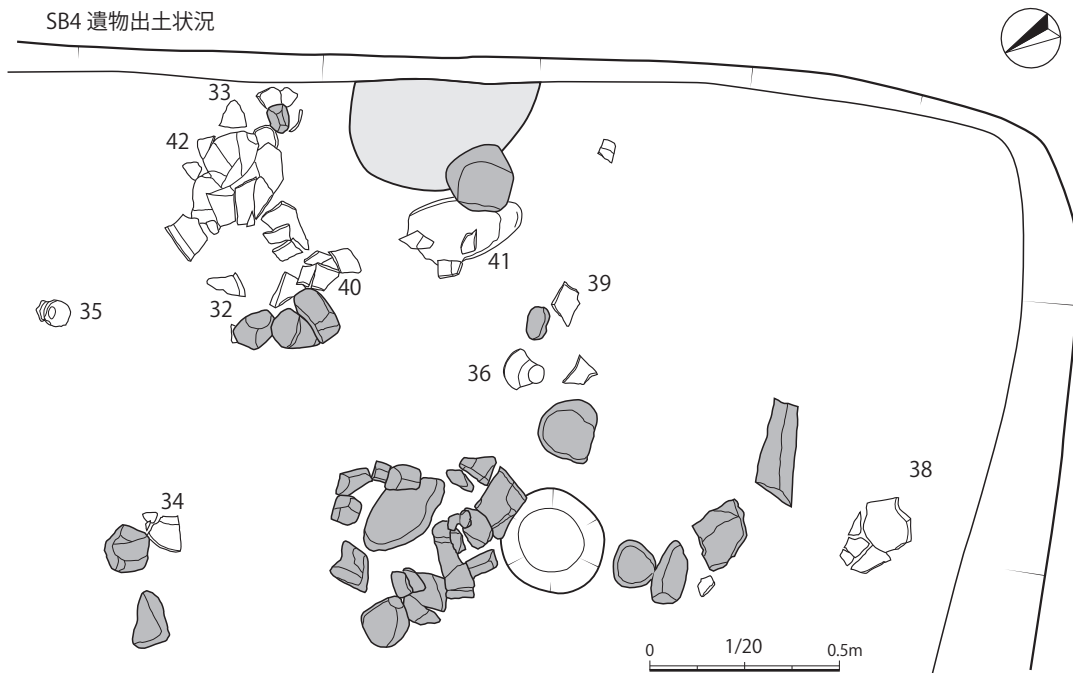
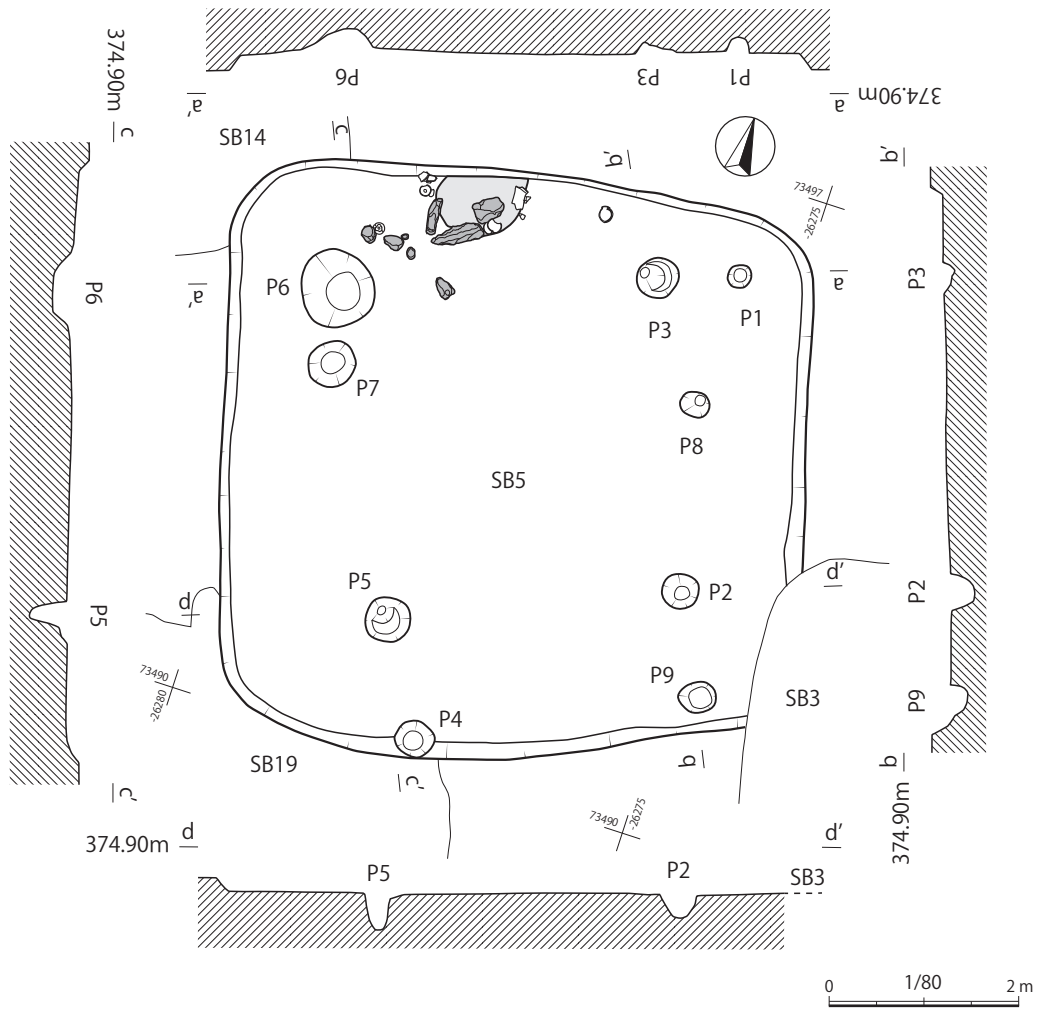


図14 遺構実測図3 (SB4)



SB5



SB5 カマド遺物出土状況

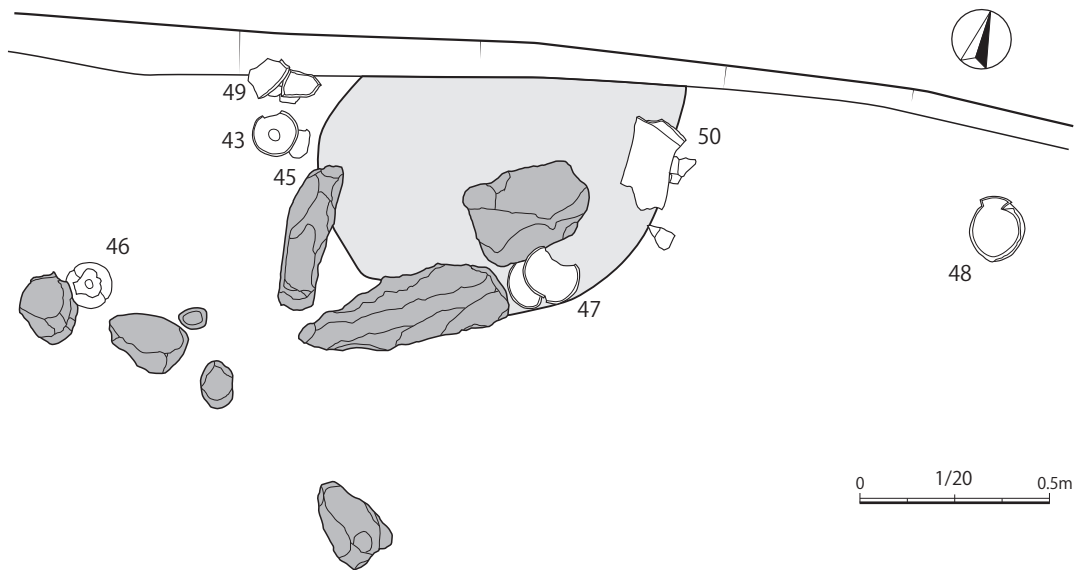
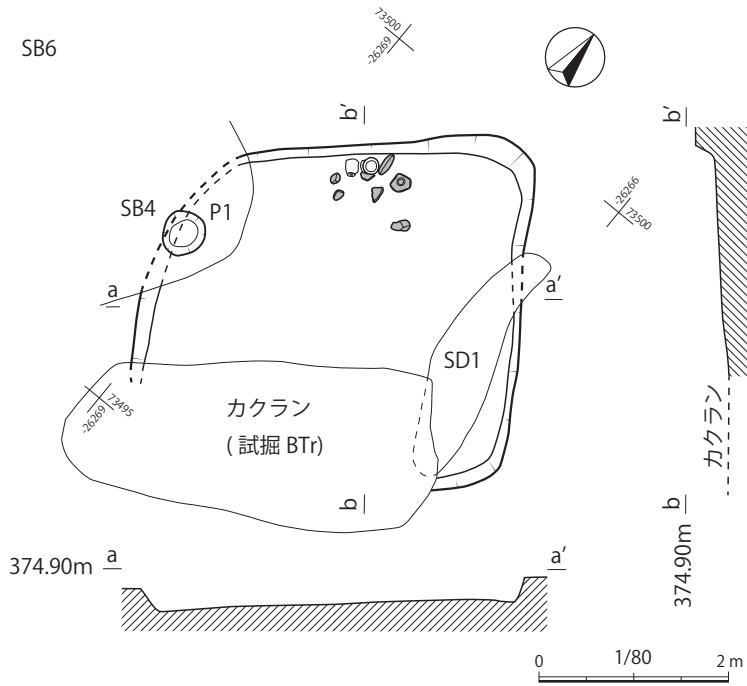


図15 遺構実測図4 (SB5)



SB6 遺物出土状況

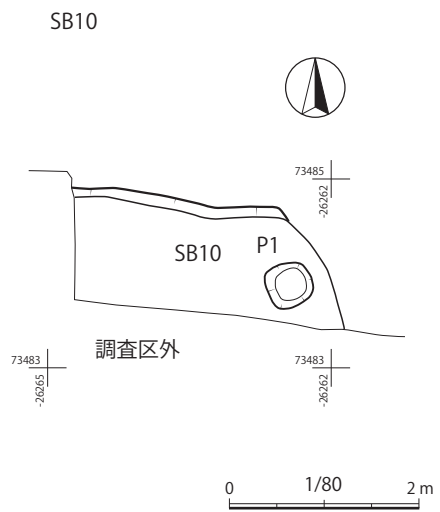
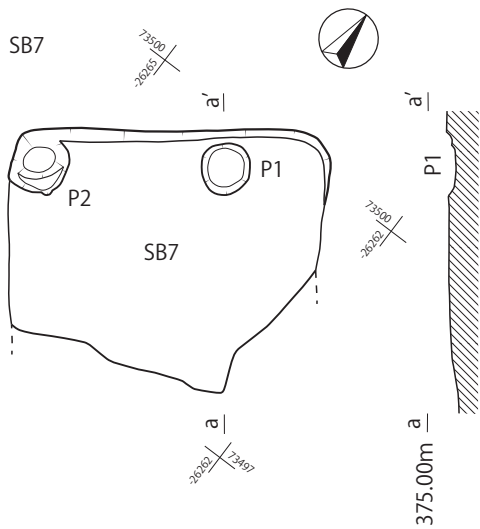
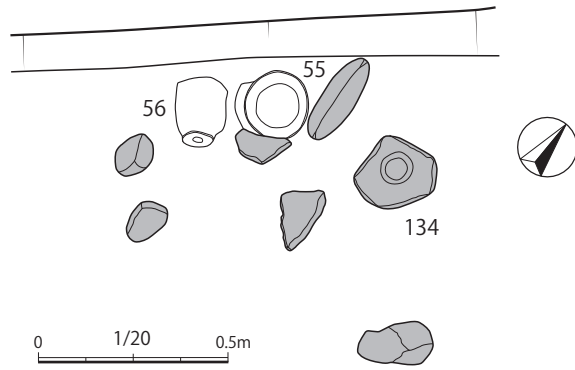


図16 遺構実測図5 (SB6・7・10)

SB11・12

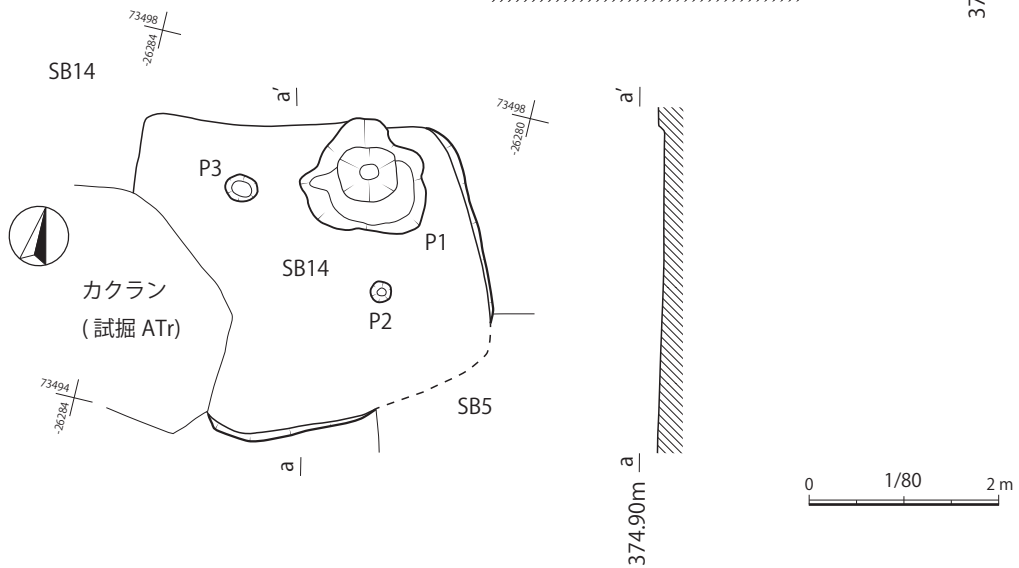
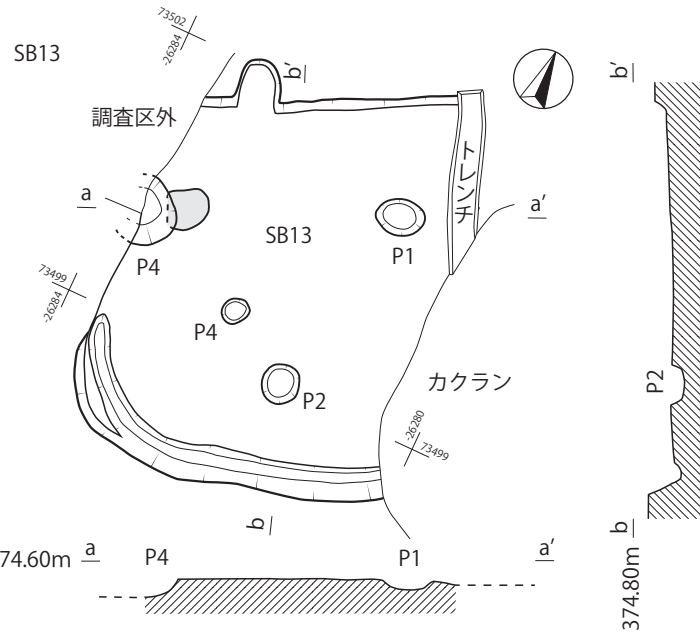
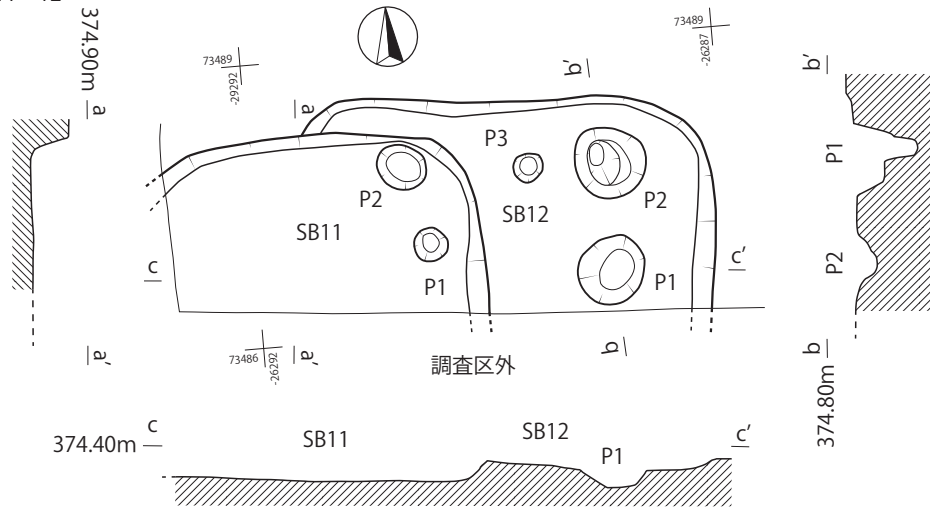
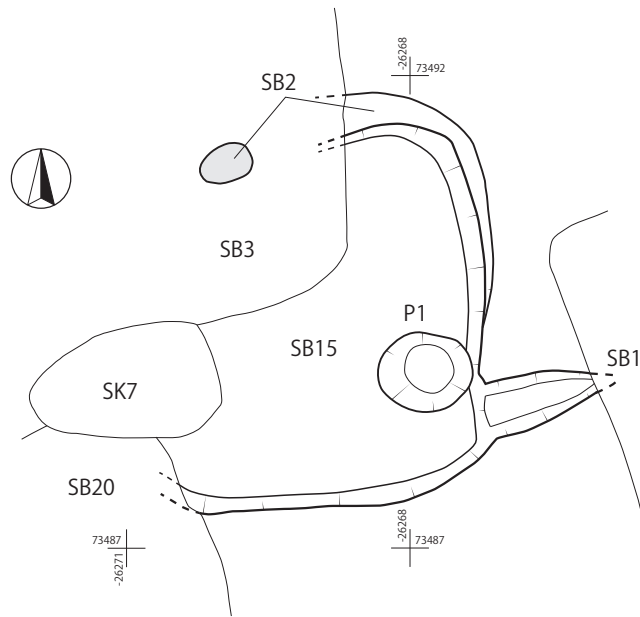


図17 遺構実測図6 (SB11・12・13・14)

SB2・SB15



SB16

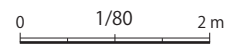
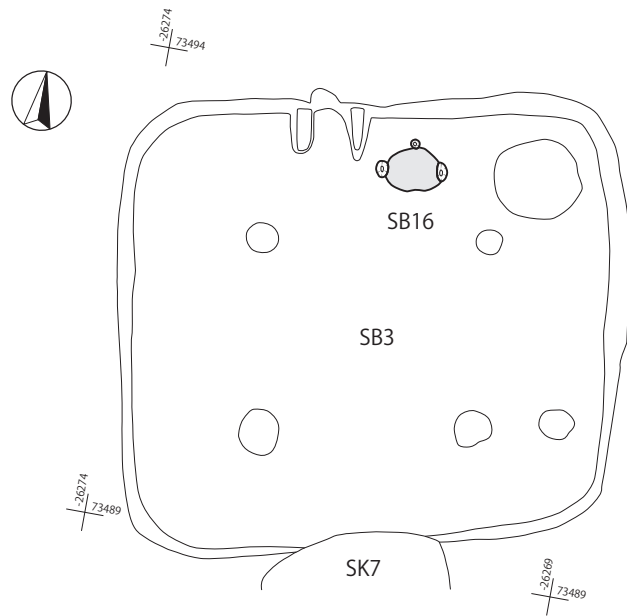


図18 遺構実測図7 (SB2・15・16)

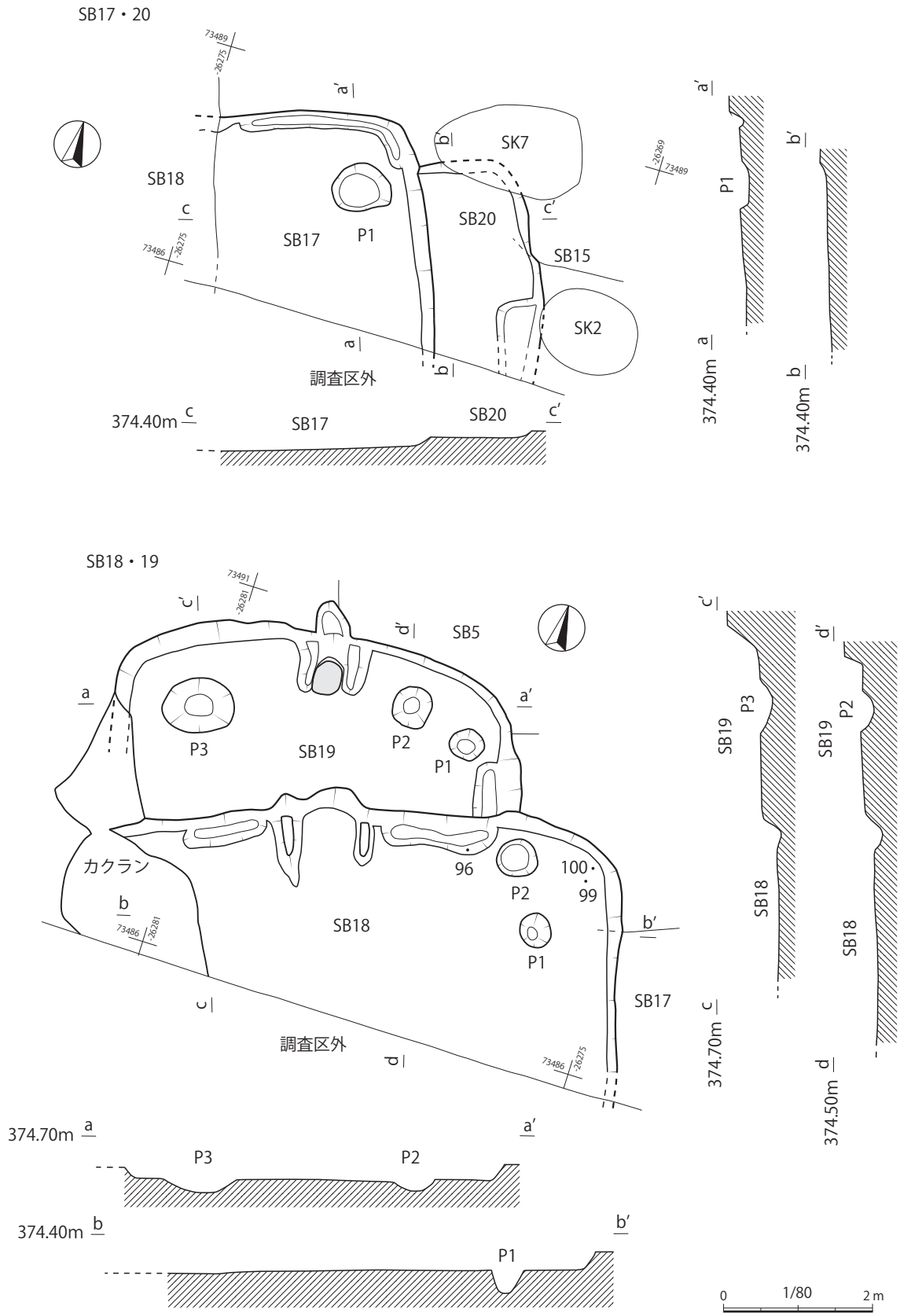


図19 遺構実測図8 (SB17・18・19・20)

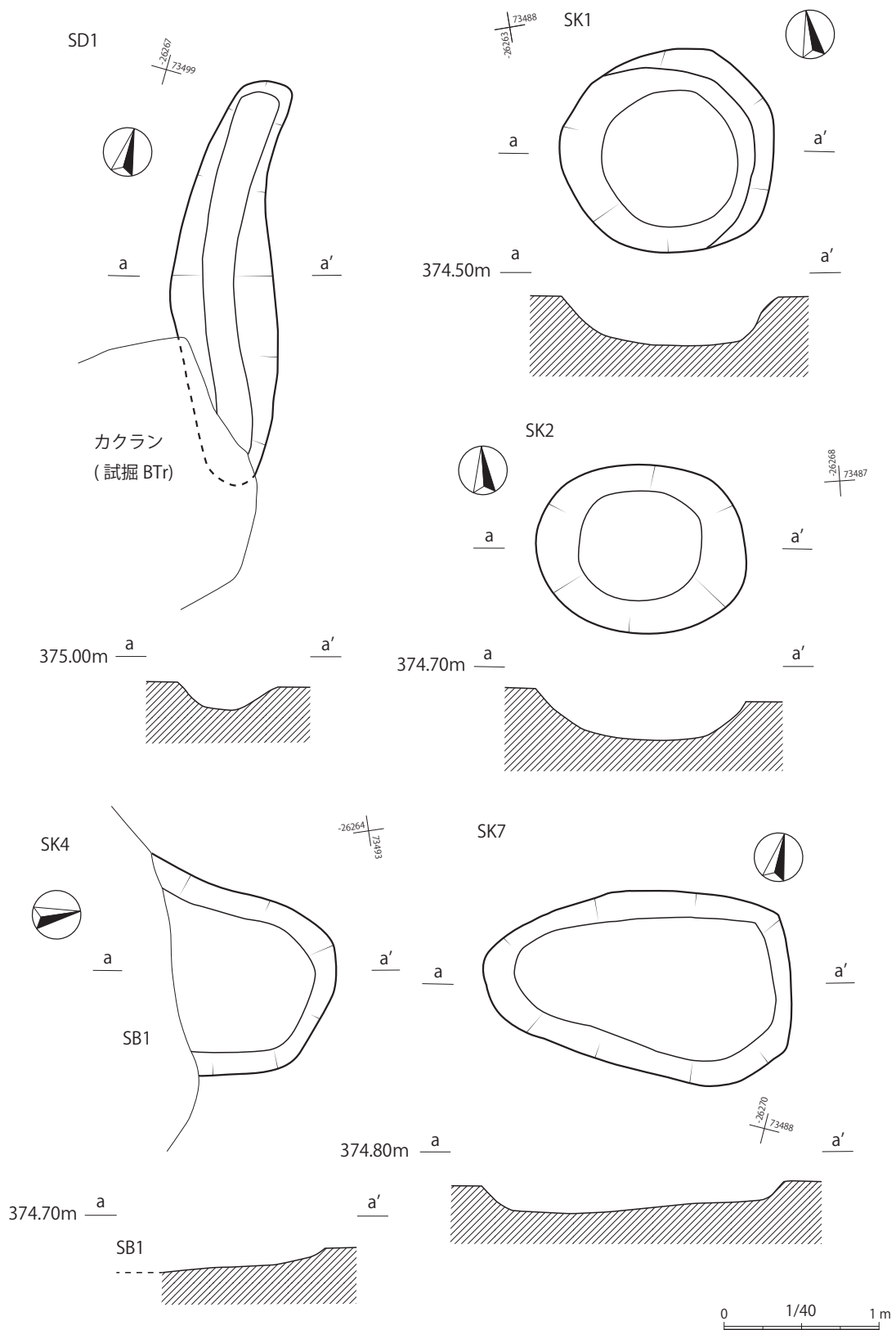


図20 遺構実測図9 (SD1・SK1・2・4・7)

遺構写真1



調査区全景（北東から）



調査区全景（南西から）

遺構写真2



S B 1 完掘 (南から)



S B 3 完掘 (南から)



S B 3 カマド遺物出土状況 (南から)



S B 3・16完掘 (南から)



S B 4 完掘 (北西から)



S B 4 遺物出土状況 (南から)



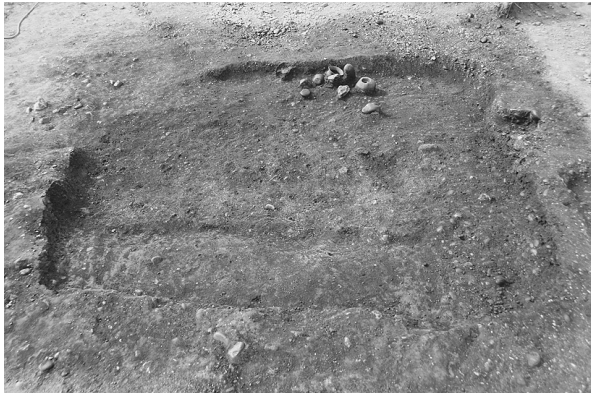
S B 5 完掘 (南から)



S B 5 カマド遺物出土状況 (南から)



遺構写真3



S B 6 遺物出土状況 (南から)



S B 6 遺物出土状況 (南から)



S B 7 完掘 (南東から)



S B 10 完掘 (北から)



S B 11 完掘 (北から)



S B 12 完掘 (北から)



S B 11・12 完掘 (北から)



S B 13 完掘 (東から)

遺構写真 4



S B17 完掘 (南から)



S B18 完掘 (南から)



S B18 遺物出土状況 (南から)



S B19 完掘 (南から)



S B19 カマド完掘 (南から)



S B17・18・19・20 完掘 (南東から)



調査区南壁 断面 (北西から)



調査区南壁 断面 (北東から)

表2 遺物観察表

図	図版		出土遺構		種別	器種	残存		寸法 (cm)			成形・調整		備考	
	番号	遺構名	位置	器高			口径	底径	器高	外面	内面				
21	1	SB1	覆土	土師器	杯	全形	1/3	11.0	4.5	3.0	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ		
21	2	SB1	覆土	土師器	杯	全形	4/5	10.8	4.8	3.4	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	黒斑	
21	3	SB1	覆土	土師器	杯	全形	5/6	13.5	5.25	3.95	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ		
21	4	SB1	覆土	黒色	杯	全形	2/3	12.4	丸底	4.2	ミガキ	ケズリ→ミガキ	ミガキ 黒色		
21	5	SB1	覆土	黒色	杯	全形	1/1	10.9	丸底	4.8	ミガキ	ミガキ	ミガキ 黒色	刻書	
21	6	SB1	覆土	黒色	高台付杯	底	1/1	-	7.75	(3.1)	ロクロナデ	回転糸切	ミガキ 黒色		
21	7	SB1	覆土	土師器	高台付杯	全形	2/3	14.8	7.8	5.5	ロクロナデ	ヘラ切り?	ロクロナデ		
21	8	SB1	覆土	土師器	高台付杯	全形	2/5	15.8	8.4	5.6	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ		
21	9	SB1	覆土	須恵器	高台付杯	全形	1/4	14.2	8.4	4.0	ロクロナデ	回転ケズリ?	ロクロナデ		
21	10	SB1	床	黒色	高杯	全形	3/4	12.4	8.35	9.35	ミガキ	ミガキ	ミガキ ナデ 黒色	黒斑	
21	11	SB1	カマド	土師器	甕	全形	1/2	14.8	8.4	15.45	横ナデ	ミガキ	ハケ→ナデ	黒斑	
21	12	SB1	覆土	土師器	甕	脚	1/2	-	-	(17.5)	ハケ	ハケ	ハケ		
21	13	SB1	覆土	土師器	甕	口~脚	1/2	20.1	-	(27.2)	横ナデ	ケズリ	横ナデ	板状工具ナデ	
21	14	SB1	覆土	土師器	甕	脚中~底	1/2	-	8.3	(10.0)	ハケ	ケズリ ナデ	ハケ ナデ		
21	15	SB1	覆土	土師器	甕	脚~底	4/5	-	7.3	(22.6)	ケズリ	強いナデ	板状工具ナデ	胎士の粒子が非常に粗い	
22	16	SB2	覆土	須恵器	杯蓋	全形	1/2	15.5	-	3.25	ロクロナデ	回転ケズリ	ロクロナデ	黒斑 内外面とも摩耗激しい	
22	17	SB2	覆土	黒色	高台付杯	全形	2/3	14.6	7.3	5.55	ロクロナデ	回転糸切→ナデ	ロクロナデ	つまみ径2.8cm	
22	18	SB2	覆土	土師器	甕	底	1/2	-	8.3	(5.8)	ハケ→ナデ	ハケ	ナデ		
22	19	SB2	覆土	灰釉陶器	皿	底	1/1	-	7.2	(2.15)	ロクロナデ	回転ケズリ	ロクロナデ	内面底部に重ね焼痕あり	
22	20	SB3	覆土	黒色	杯	全形	1/3	5.5	1.9	4.6	横ナデ	ケズリ→ミガキ	ミガキ 黒色	黒斑	
22	21	SB3	床直	須恵器	杯	全形	1/2	12.0	-	(4.0)	ロクロナデ	回転ケズリ 静止ケズリ	ロクロナデ		
22	22	SB3	覆土	須恵器	杯	底	1/5	-	5.8	(1.45)	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	墨書	
22	23	SB3	覆土	土師器	高杯	脚	1/4	-	-	(8.0)	ミガキ	ミガキ	指ナデ	工具ナデ	
22	24	SB3	覆土	黒色	甕	全形	1/2	12.8	7.1	13.2	ケズリ→ミガキ	ケズリ	ミガキ 黒色	黒斑	
22	25	SB3	床	土師器	甕	底	1/1	-	3.9	(7.7)	ナデ	ケズリ	板状工具ナデ	黒斑	
22	26	SB3	床	黒色	甕	全形	1/1	17.7	2.7	11.3	ナデ	ケズリ	ハケ	ミガキ 黒色	
22	27	SB3	覆土	黒色	甕	把手	1/1	-	-	-	ミガキ	ミガキ	ミガキ 黒色		
22	28	SB3	床	土師器	甕	口~脚	3/4	19.4	-	(31.7)	横ナデ	ハケ→ミガキ	ハケ	板状工具ナデ→ミガキ	黒斑 脚部スス付着
22	29	SB3	カマド	土師器	甕	口	1/1	18.3	-	(7.9)	横ナデ	ハケ	横ナデ	ハケ	
22	30	SB3	床直	土師器	甕	口~脚	1/5	19.2	-	(20.1)	ハケ→ナデ	ハケ	ナデ	工具ナデ	
22	31	SB3	カマド	土師器	甕	脚	1/2	-	-	(27.0)	ハケ→ケズリ	ハケ	板状工具ナデ	指ナデ	
23	32	SB4	覆土	須恵器	蓋	全形	1/2	15.6	-	3.2	ロクロナデ	回転ケズリ	ロクロナデ	つまみ径3.2cm	
23	33	SB4	覆土	黒色	杯	全形	4/5	12.0	-	(5.65)	ミガキ	ケズリ→ミガキ	ミガキ 黒色	黒斑	
23	34	SB4	覆土	黒色	杯	全形	1/2	11.6	丸底	4.7	ケズリ→ミガキ	ミガキ	ミガキ 黒色	内面縦刻	
23	35	SB4	覆土	黒色	高杯	口~脚	2/3	14.0	-	(9.5)	ミガキ	指ナデ	横ナデ	ミガキ 黒色	

図版	出土遺構		種別	器種	残存		寸法 (cm)			成形・調整		備考	
	遺構名	位置			部位	遺存	口径	底径	器高	外面	内面		
23	36	SB4	覆土	土師器	高杯	脚	3/4	-	11.0	(8.3)	ミガキ	板状工具ナデ 横ナデ	
23	37	SB4	覆土	土師器	甗	把手	1/1	-	-	-	ミガキ		
23	38	SB4	床	土師器	甗	全形	1/4	19.8	7.8	22.4	ミガキ	ケズリ→ミガキ	
23	39	SB4	覆土	土師器	甗	口	1/3	14.6	-	(7.6)	横ナデ	板状工具ナデ	
23	40	SB4	覆土	土師器	甗	口~胴	1/6	19.6	-	(20.3)	横ナデ	板状工具ナデ	
23	41	SB4	覆土	土師器	甗	全形	4/5	19.3	6.0	30.1	ナデ	ハケ→ケズリ	
23	42	SB4	床	土師器	甗	全形	9/10	20.5	5.4	32.8	横ナデ	板状工具ナデ	黒斑 外面スス付着
24	43	SB5	覆土	土師器	杯	全形	1/1	11.7	7.5	3.9	ナデ	ケズリ	丸底
24	44	SB5	覆土	土師器	杯	全形	1/2	9.6	4.5	4.4	ナデ→ミガキ		
24	45	SB5	覆土	黒色	高杯	杯	1/3	13.6	-	(5.6)	ミガキ		外面摩耗
24	46	SB5	床直	黒色	高杯	全形	1/1	10.6	9.3	9.9	ミガキ		
24	47	SB5	カマド	黒色	高杯	全形	9/10	15.1	11.8	11.4	ケズリ→ミガキ	ナデ	
24	48	SB5	床	土師器	甗	口~胴上	1/1	15.4	-	(8.6)	横ナデ	縦ハケ	
24	49	SB5	覆土	土師器	甗	全形	1/2	14.5	8.2	21.2	横ナデ	工具ナデ	
24	50	SB5	カマド	土師器	甗	口~胴	1/4	19.7	-	(22.4)	横ナデ	縦ハケ	
24	51	SB6	覆土	土師器	杯	底	1/1	-	4.3	(1.4)	ロクロナデ	回転糸切→ナデ	黒斑
24	52	SB6	覆土	土師器	高杯	脚	1/3	-	-	(8.35)	ミガキ		
24	53	SB6	床	土師器	甗	底	2/3	-	6.0	(2.8)	ナデ	工具ナデ	
24	54	SB6	覆土	土師器	甗	全形	3/4	11.6	8.3	19.25	ミガキ		黒斑 一部剝離
24	55	SB6	カマド	土師器	甗	口	1/1	18.1	-	(9.15)	横ナデ	ハケ	黒斑
24	56	SB6	カマド	土師器	甗	胴中~底	1/1	-	7.4	(17.6)	ハケ	ナデ	
25	57	SB7	覆土	土師器	杯	全	1/4	10.8	4.4	3.3	ロクロナデ	回転糸切	
25	58	SB7	覆土	土師器	杯	全形	7/8	12.6	4.7	3.7	ロクロナデ	回転糸切	
25	59	SB7	覆土	土師器	杯	全形	1/2	12.3	5.6	3.5	ロクロナデ	回転糸切	
25	60	SB7	覆土	土師器	杯	全形	2/3	12.5	4.5	4.05	ロクロナデ	回転糸切	黒斑
25	61	SB7	覆土	土師器	杯	底	1/1	-	4.4	(1.3)	ロクロナデ	回転糸切	
25	62	SB7	覆土	土師器	杯	底	1/1	-	5.5	(2.3)	ロクロナデ	回転糸切	
25	63	SB7	覆土	黒色	高台付杯	底	1/1	-	6.4	(1.7)	ロクロナデ		
25	64	SB11	覆土	須恵器	杯	全形	1/3	12.8	6.2	3.9	ロクロナデ	回転糸切	
25	65	SB11	床	土師器	甗	口~胴中	1/4	14.6	-	(11.55)	ロクロナデ		
25	66	SB11	覆土	土師器	甗	全形	1/4	20.4	8.6	29.5	横ナデ	ナデ	底木葉痕
25	67	SB11	覆土	土師器	甗	把手	1/1	-	-	-	ナデ		
25	68	SB12	P1	黒色	杯	全形	1/1	15.4	6.3	4.95	ロクロナデ	回転糸切	
25	69	SB12	P1	土師器	杯	全形	1/1	17.1	6.2	4.8	ロクロナデ	回転糸切	
25	70	SB12	P1	土師器	甗	全形	3/5	22.4	丸底	(27.0)	ロクロナデ	ケズリ 平行タタキ	
26	71	SB11・12	覆土	土師器	杯	全形	2/3	11.5	4.8	3.05	ロクロナデ	回転糸切	灯明皿?

図版 図番号	出土遺構		種別	器種	残存		寸法 (cm)			成形・調整		備考	
	遺構名	位置			部位	遺存	口径	底径	器高	外面	内面		
26	72	SB11・12	覆土	土師器	杯	全形	2/3	11.8	5.0	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	
26	73	SB11・12	覆土	土師器	高台付杯	底	2/3	-	8.8	(3.9)	ロクロナデ	ナデ	
26	74	SB11・12	覆土	灰釉陶器	皿	全形	1/2	14.4	7.3	2.9	ロクロナデ	回転ケズリ ナデ	口縁輪花(指押し)
26	75	SB11・12	覆土	緑釉陶器	段皿	口		(15.0)	-	(1.9)			
26	76	SB13	覆土	須恵器	高台付杯	底	1/6	-	10.6	(2.3)	ロクロナデ	回転ケズリ	
26	77	SB13	床直	土師器	高杯	脚	1/2	-	-	(8.8)	ミガキ	ナデ 板状工具ミガキ	
26	78	SB13	覆土	土師器	高杯	脚	1/4	-	-	(9.6)	ミガキ	ナデ 横ナデ	
26	79	SB13	覆土	土師器	鉢	全形	2/3	13.6	丸底	8.85	横ナデ	ケズリ	
26	80	SB13	PI	土師器	甗	全形	7/8	15.6	4.7	15.65	横ナデ	ケズリ→ミガキ	黒斑
26	81	SB13	覆土	土師器	甗	口~胴	4/5	19.7	-	(30.3)	横ナデ	ケズリ	
26	82	SB14	床直	黒色	杯	全形	1/3	12.9	5.6	3.85	ロクロナデ	回転糸切	
26	83	SB14	床直	須恵器	杯	全形	1/4	13.0	5.6	3.55	ロクロナデ	回転糸切	
26	84	SB14	覆土	土師器	高杯	脚	1/4	-	-	(4.6)	ミガキ	ナデ	ミガキ
26	85	SB14	PI	土師器	甗	口~胴上	1/7	18.0	-	(9.9)	ロクロナデ		
27	86	SB15	覆土	黒色	杯	全形	4/5	12.9	5.8	3.75	ロクロナデ	回転糸切	
27	87	SB15	覆土	黒色	杯	全形	1/2	13.0	6.3	4.2	ロクロナデ	回転糸切	内面やや摩耗
27	88	SB15	覆土	黒色	高台付杯	胴~底	1/2	-	8.0	(5.6)	ロクロナデ	回転糸切 回転ナデ	
27	89	SB15	覆土	黒色	高杯	脚	2/3	-	10.4	(6.4)	ミガキ	ナデ	ミガキ 黒色
27	90	SB15	覆土	土師器	高杯	脚	1/2	-	-	(6.6)	ケズリ→ミガキ	板状工具ナデ	ミガキ
27	91	SB15	覆土	黒色	甗	把手	1/1	-	-	-	ミガキ	黒色	
27	92	SB15	覆土	土師器	甗	口	1/4	14.0	-	(12.0)	横ナデ	ケズリ	ロクロナデ
27	93	SB15	覆土	土師器	甗	底	1/1	-	4.2	(8.7)	ケズリ		外面スス付着
27	94	SB17	覆土	黒色	手づくね	全形	4/5	8.0	4.2	5.45	指ナデ	黒色	
27	95	SB17	覆土	土師器	甗	胴中~底	1/2	-	7.35	(14.65)	ケズリ	ナデ	
27	96	SB18	床直	須恵器	杯蓋	全形	1/1	11.1	-	2.6	ロクロナデ	回転ケズリ	黒斑
27	97	SB18	覆土	黒色	杯	全形	4/5	14.3	丸底	4.0	ナデ?		暗文
27	98	SB18	覆土	土師器	杯	全形	1/4	12.6	丸底	4.5	横ナデ→ミガキ	ケズリ	
27	99	SB18	床	黒色	高杯	全形	2/3	17.6	11.4	10.7	ミガキ	ナデ	ミガキ 黒色
27	100	SB18	床直	黒色	高杯	全形	4/5	18.1	-	(14.95)	ミガキ	ナデ	板状工具ナデ ナデ
28	101	SB17・18	覆土	土師器	杯	全形	1/3	11.6	丸底	3.1	ミガキ		透かし孔2ヶ
28	102	SB17・18	覆土	黒色	高杯	杯	1/4	11.4	-	(3.85)	ミガキ	黒色	
28	103	SB17・18	覆土	黒色	高杯	脚	1/2	-	-	(7.55)	ミガキ	ナデ	ミガキ 黒色
28	104	SB17・18	覆土	須恵器	壺	口	1/3	10.2	-	(3.8)	ロクロナデ		
28	105	SB17・18	覆土	土師器	甗	把手	1/1	-	-	-	ナデ	工具ナデ	横ナデ
28	106	SB17・18	覆土	土師器	甗	口~胴上	1/4	26.2	-	(12.85)	ロクロナデ		
28	107	SB19	カマド	土師器	甗	口~胴上	2/3	16.7	-	(9.7)	横ナデ	ナデ	

図版	出土遺構		種別	器種	残存		寸法 (cm)			成形・調整		備考	
	遺構名	位置			部位	遺存	口径	底径	器高	外面	内面		
28	108	S B 19	土師器	甕	全形	2/3	16.9	7.7	21.5	ハケミガキ	ナデ	工具ナデ	
28	109	S B 20	黒色	高杯	脚		-	-	(3.9)	ナデ	ナデ	ミガキ 黒色	
28	110	S B 20	土師器	甕	口~胴中	1/3	12.2	-	(16.9)	横ナデ	ケズリ	ナデ?	
28	111	S K 2	須恵器	鉢	全形	1/4	15.2	9.2	7.9	ロクロナデ	ナデ	ロクロナデ	刻書?
28	112	S K 2	黒色	高杯	脚	1/2	-	-	(5.8)	ミガキ	ナデ	ミガキ 黒色	
28	113	S K 2	土師器	高杯	脚	1/6	-	14.0	(7.6)	ミガキ	ナデ	工具ナデ	
28	114	S K 4	土師器	杯	全形	3/5	11.4	4.7	3.55	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	
28	115	S K 4	黒色	高台付杯	底	1/1	-	6.0	(2.6)	ロクロナデ	回転糸切→回転ナデ	ミガキ	
29	116		かわらけ	皿	全形	1/2	9.6	4.6	2.45	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	
29	117		須恵器	蓋	全形	1/2	19.0	-	4.1	ロクロナデ		ロクロナデ	縦刻 つまみ径3.5cm
29	118		土師器	杯	全形	1/2	13.0	5.9	3.6	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	黒斑
29	119		土師器	高台付杯	底	1/1	-	7.4	(3.0)	回転ナデ		ロクロナデ	
29	120		黒色	高台付杯	底	1/1	-	7.35	(2.35)	ロクロナデ	ナデ	ミガキ 黒色	
29	121		黒色	杯	全形	4/5	13.1	5.3	3.3	ロクロナデ	回転糸切→一部ヘラケズリ	ロクロナデ	ミガキ 黒色
29	122		黒色	杯	口	1/4	13.0	-	(3.1)	ロクロナデ		ミガキ 黒色	刻書
29	123		黒色	杯	全形	3/4	13.2	5.9	4.5	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	放射状暗文
29	124		須恵器	杯	底	1/1	-	5.25	(0.9)	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	刻書
29	125		須恵器	杯	口		-	-	-	ロクロナデ		ロクロナデ	墨書
29	126		緑釉陶器	杯	口	1/2	-	-	-	ロクロナデ		ロクロナデ	
29	127		黒色	高杯	脚	1/2	-	-	(6.15)	ミガキ	ナデ	ナデ	縦刻
29	128		土師器	甕	底	1/1	-	7.2	(4.25)	ナデ	ナデ	工具ナデ	底木葉痕
29	129		須恵器	甕	底	1/4	-	12.2	(8.55)	平行タタキ	ナデ	同心円当て具痕	ナデ

凡例

種別  
 黒色土器：黒色

部位  
 口縁部：口  
 頸部：頸  
 胴部：胴  
 底部：底  
 脚部：脚

成形・調整  
 黒色処理：黒色  
 底部回転糸切：回転糸切  
 ナデ調整：ナデ  
 ミガキ調整：ミガキ  
 ケズリ調整：ケズリ  
 ハケ調整：ハケ  
 タタキ調整：タタキ

※ ( ) 内の法量は、残存部分の計測値を示す。

図版	出土遺構		種別	器種 (遺存)	備考
	遺構名	位置			
29	130	検出面	土製品	円板(1/2)	径3.8cm 孔あり
29	131	S B 15	土製品	羽口	96g
30	132	S B 17・18	石製品	凹石	1283.64g
30	133	S B 17・18	石製品	凹石	2098.92g
30	134	S B 6	石製品	凹石	5800g
30	135	S B 14	鉄製品	刀子(2つに割れ)	56.76g・15.8×2.4cm
30	136	S B 14	鉄製品	刀子	8.54g・4.1×1.6cm
30	137	S B 15	鉄製品	刀子(2つに割れ)	17.75g・8.7×1.8cm

SB1 (1 ~ 15)

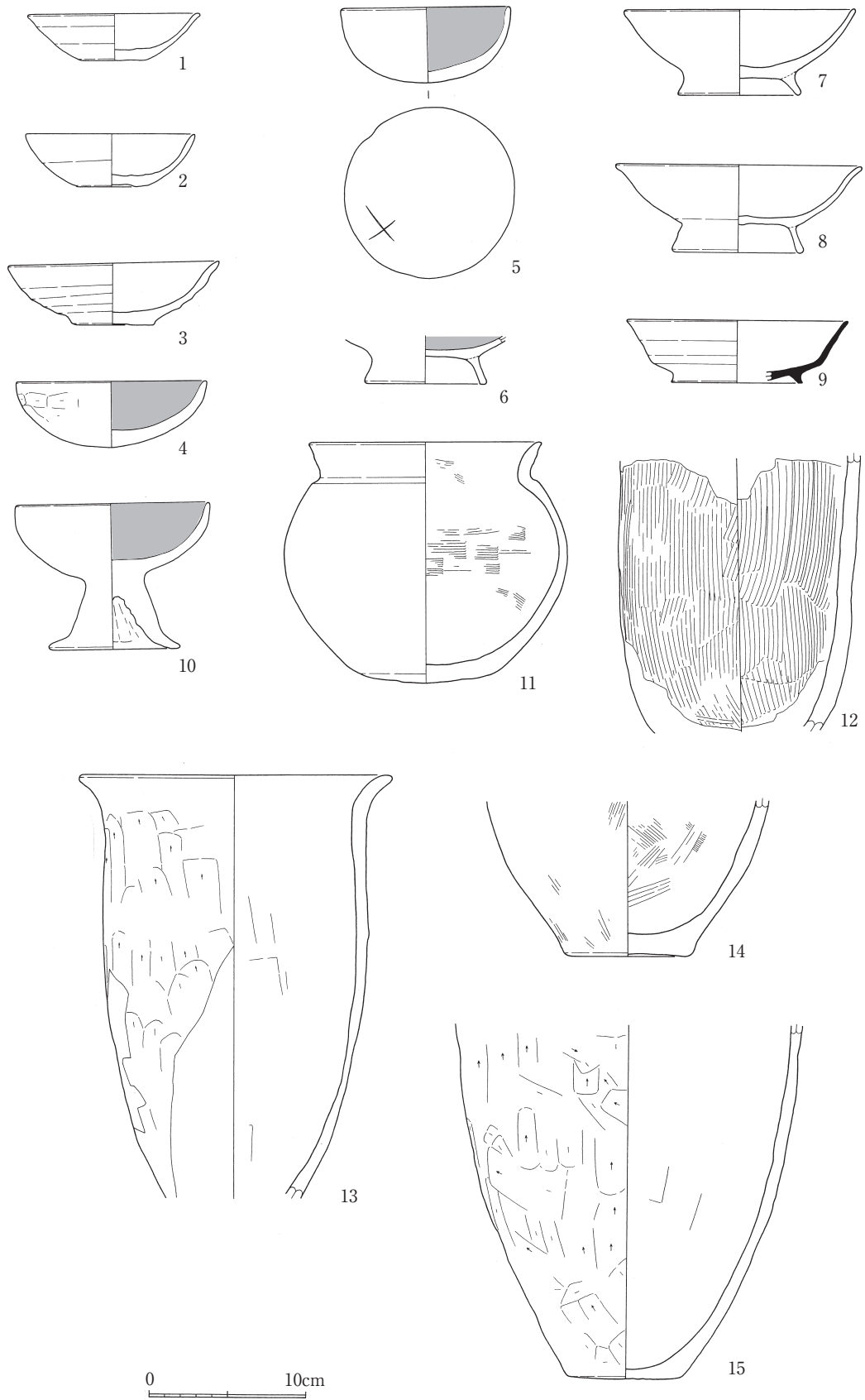
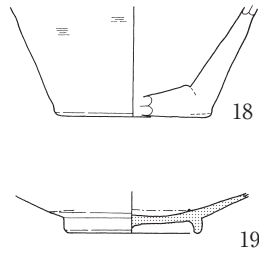
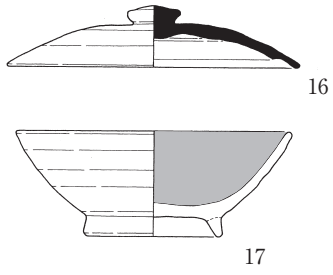


图21 遺物実測図1 (S=1/4)

SB2 (16 ~ 19)



SB3 (20 ~ 31)

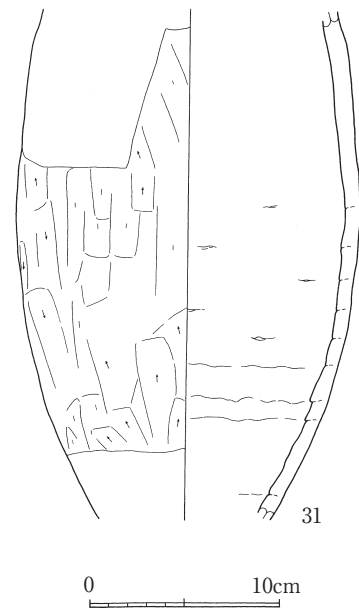
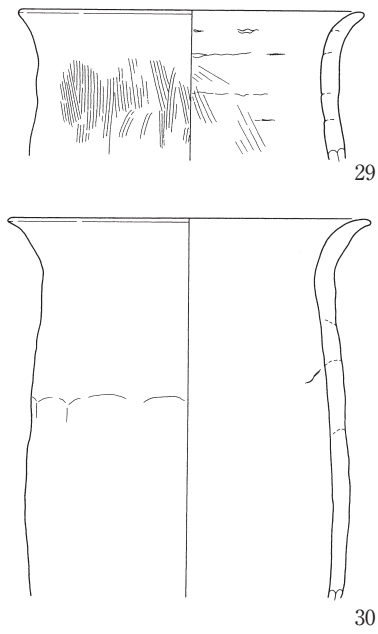
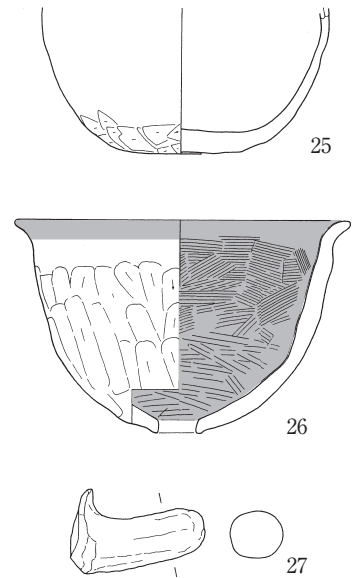
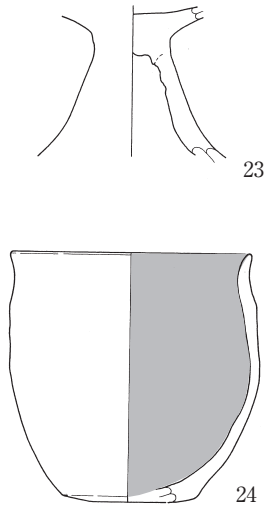
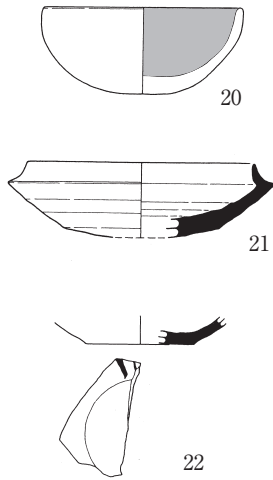


图22 遺物実測図2 (S = 1/4)



SB4 (32 ~ 42)

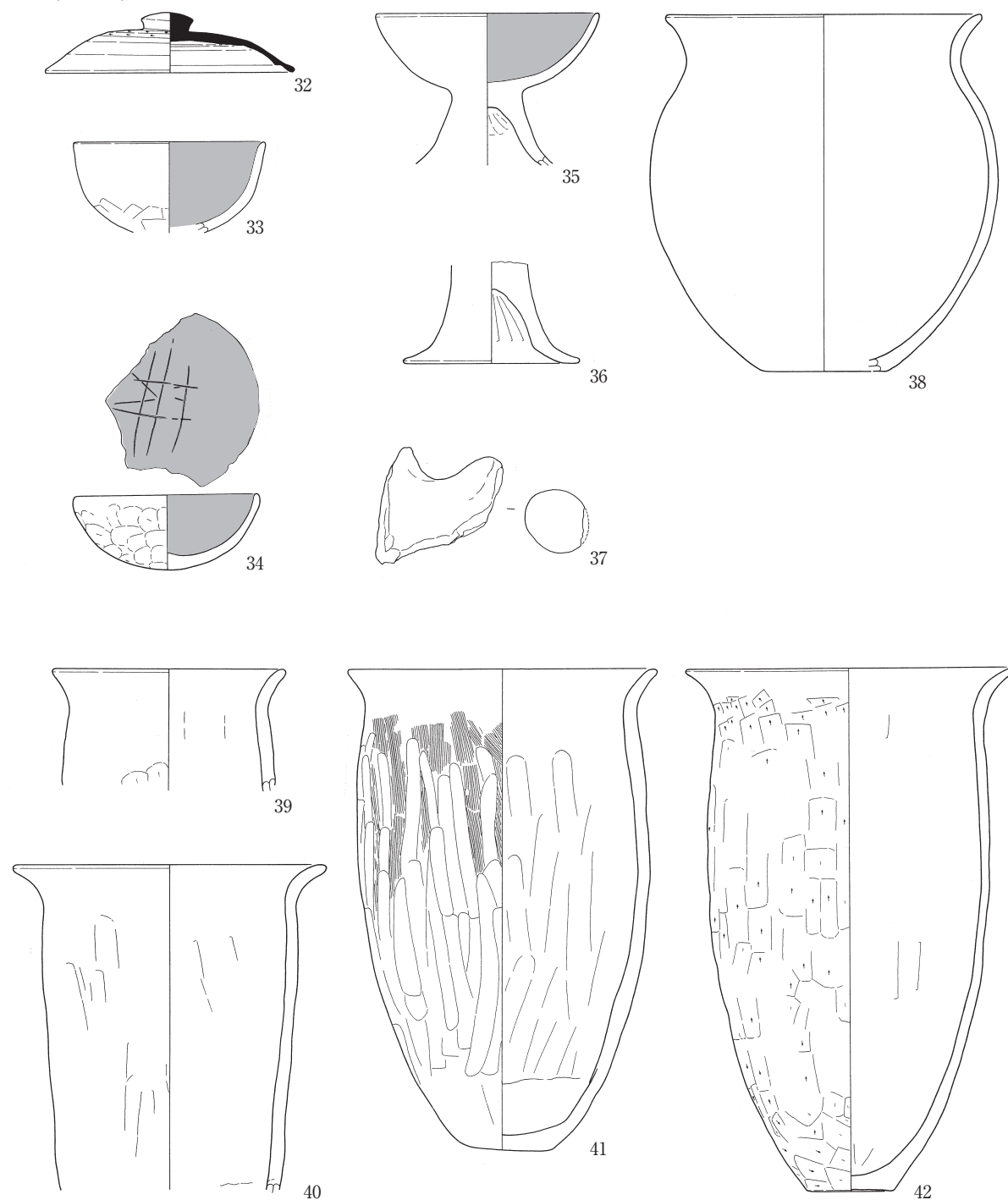
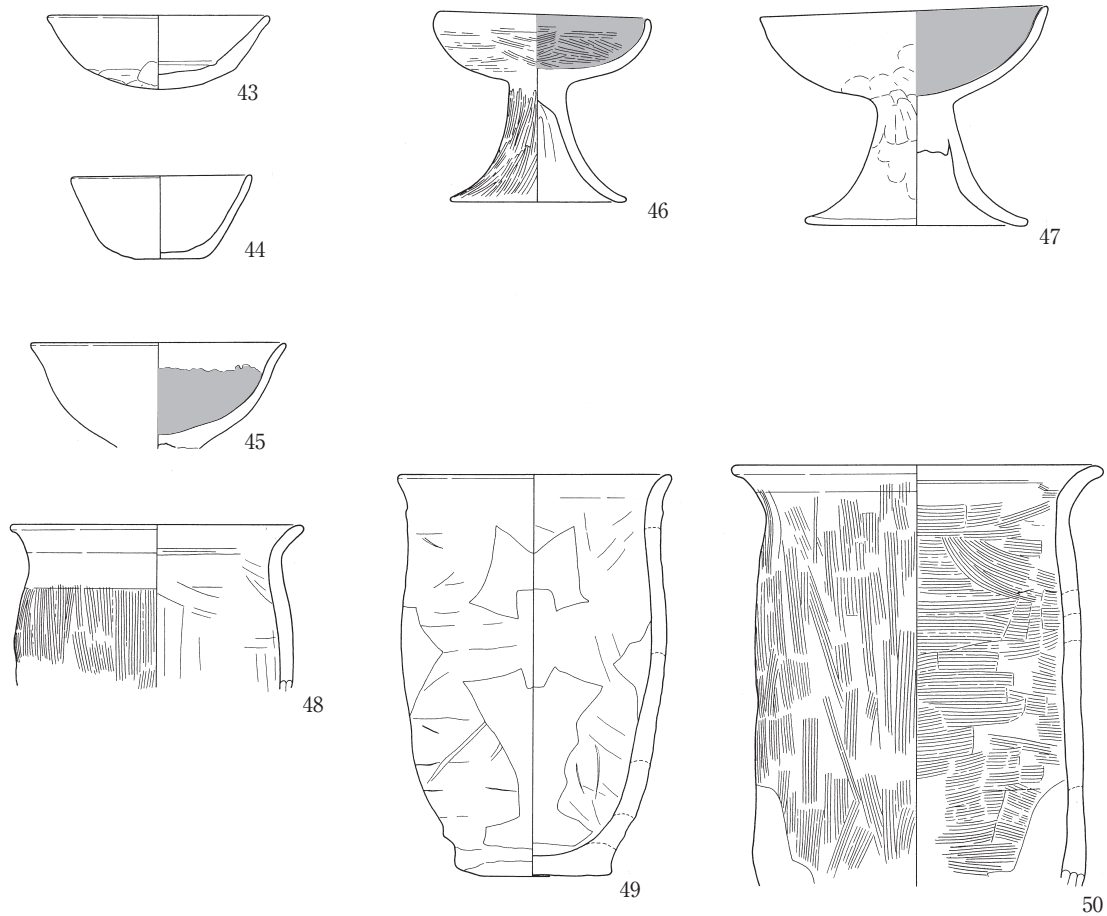


图23 遺物実測図3 (S = 1/4)

SB5 (43 ~ 50)



SB6 (51 ~ 56)

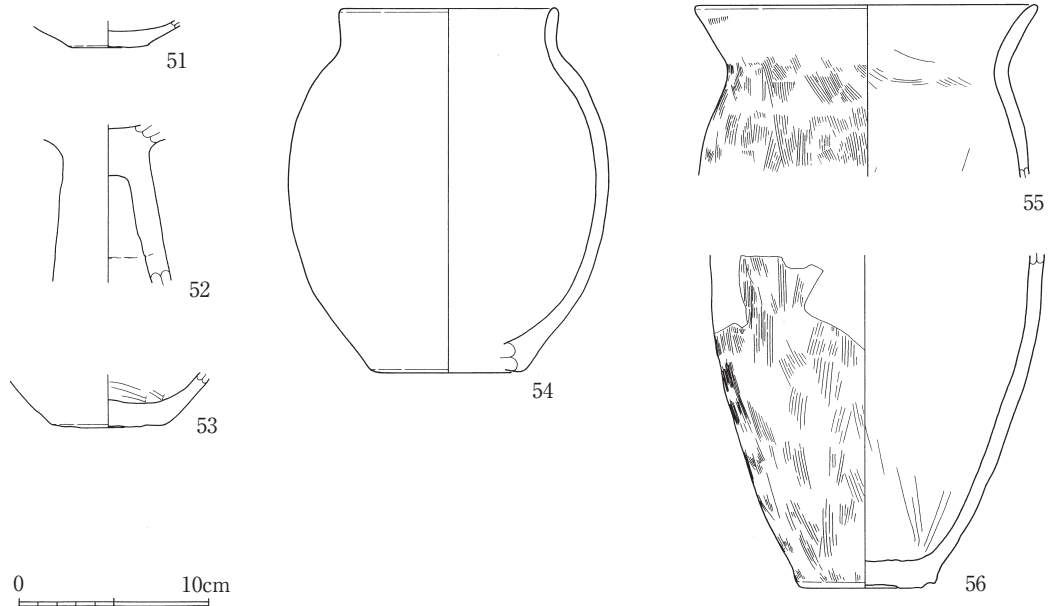
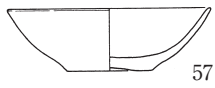
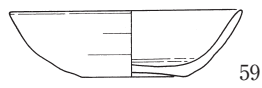


图24 遺物実測図4 (S = 1/4)

SB7 (57 ~ 63)



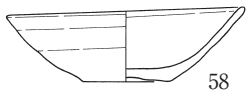
57



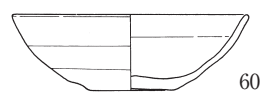
59



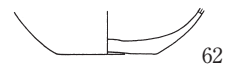
61



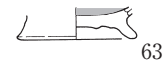
58



60

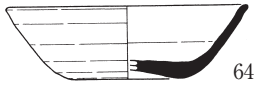


62

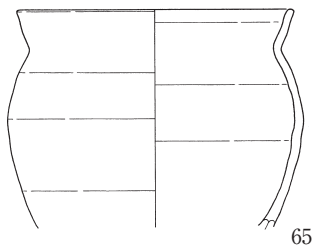


63

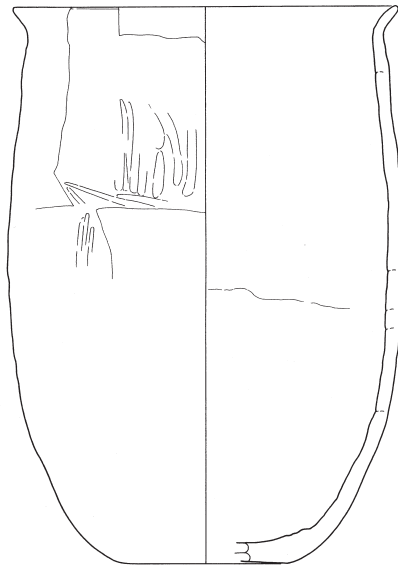
SB11 (64 ~ 67)



64



65

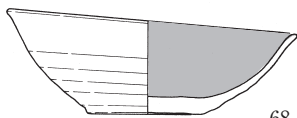


66

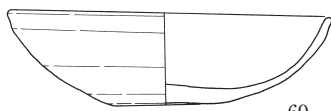


67

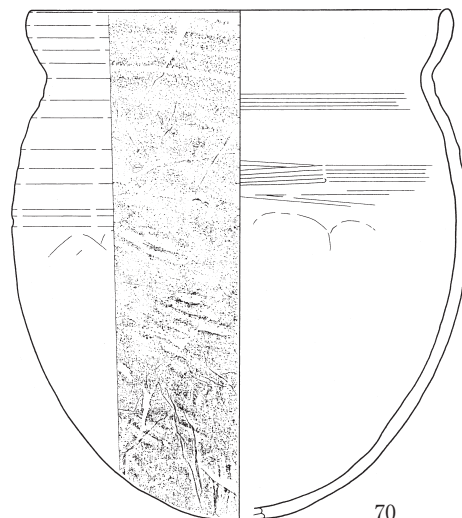
SB12 (68 ~ 70)



68



69

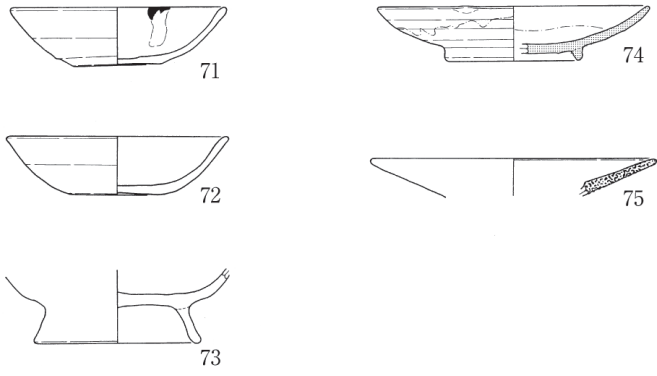


70

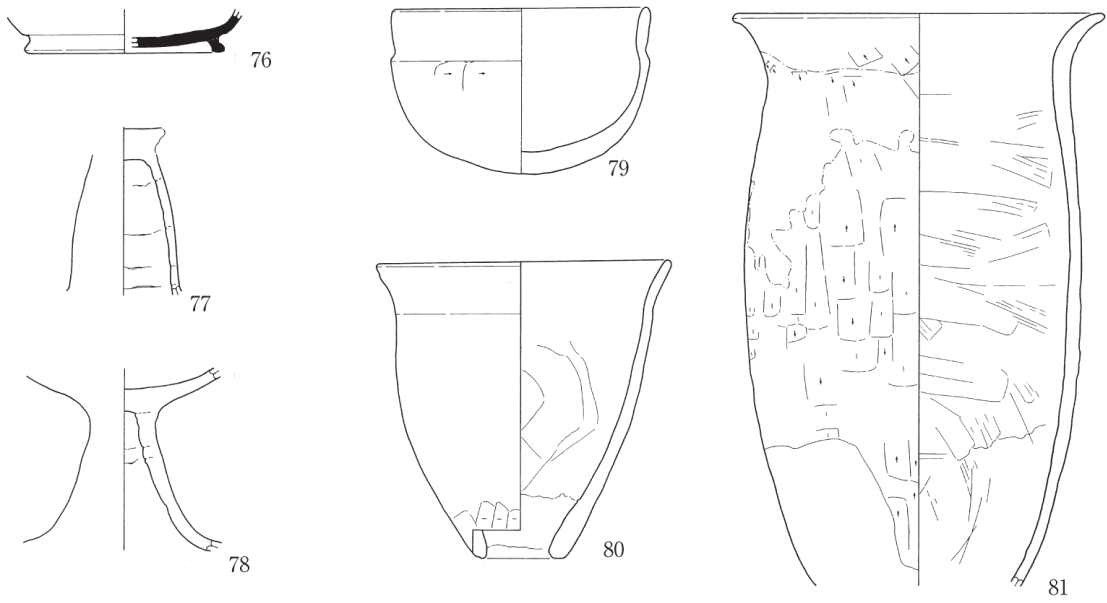
0 10cm

图25 遺物実測図5 (S=1/4)

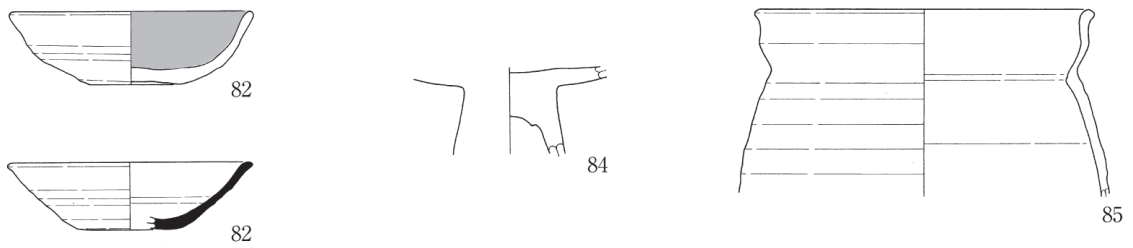
SB11 · 12 (71 ~ 75)



SB13 (76 ~ 81)



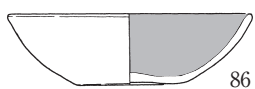
SB14 (82 ~ 85)



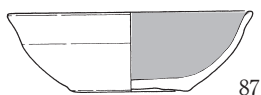
0 10cm

图26 遺物実測図6 (S = 1/4)

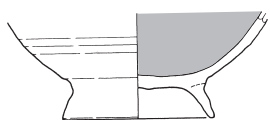
SB15 (86 ~ 93)



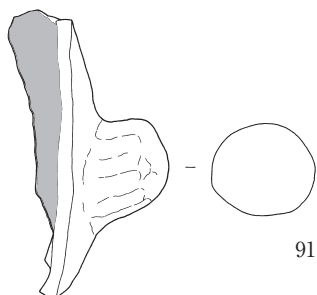
86



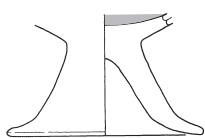
87



88



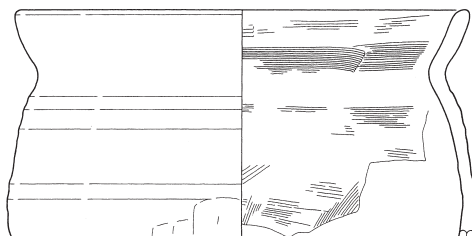
91



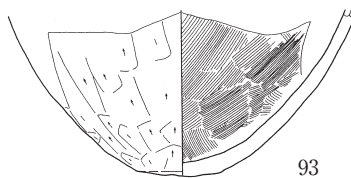
89



90

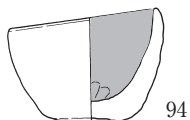


92

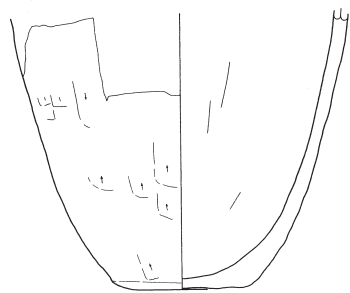


93

SB17 (94 · 95)



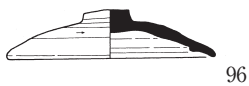
94



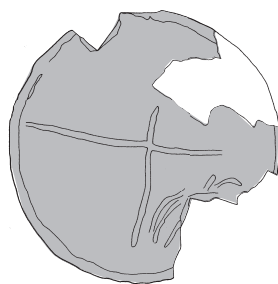
95

0 10cm

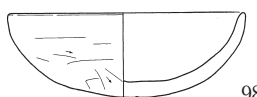
SB18 (96 ~ 100)



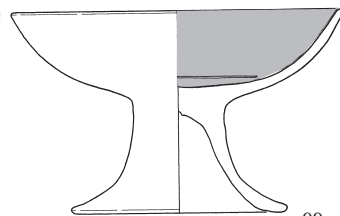
96



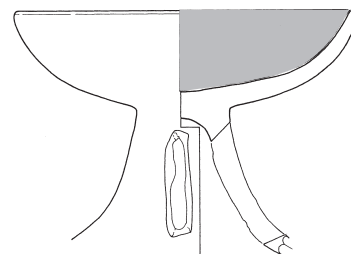
97



98



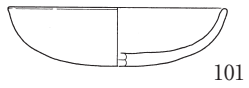
99



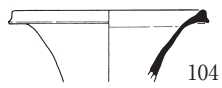
100

图27 遺物実測図7 (S=1/4)

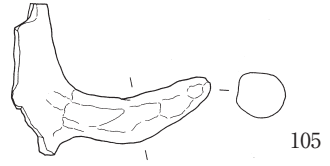
SB17 · SB18 (101 ~ 106)



101



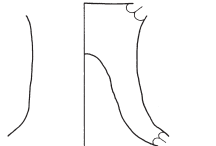
104



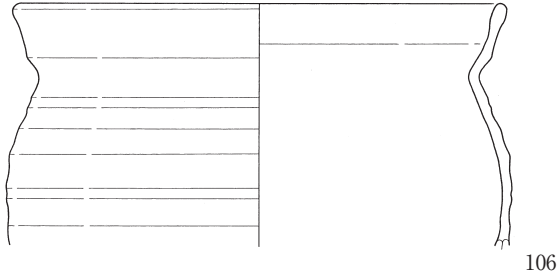
105



102

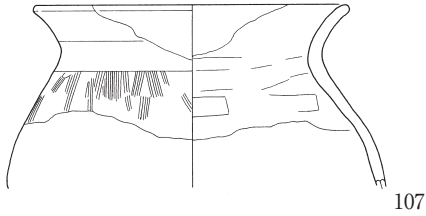


103

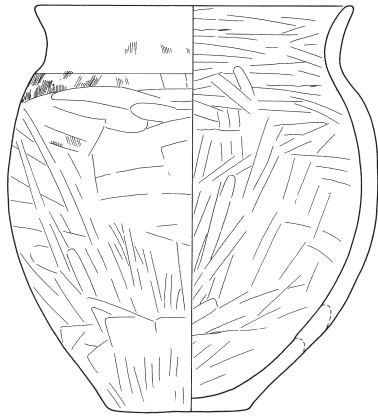


106

SB19 (107 · 108)

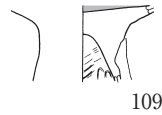


107

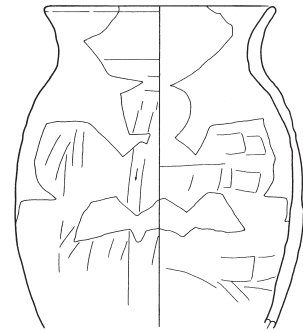


108

SB20 (109 · 110)

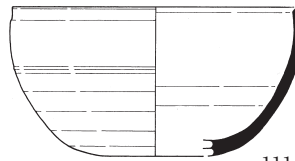


109

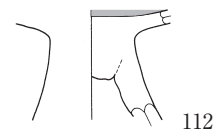


110

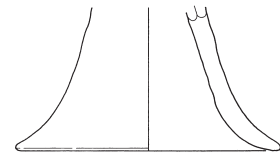
SK2 (111 ~ 113)



111

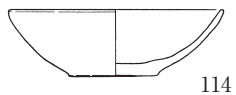


112



113

SK4 (114 · 115)



114

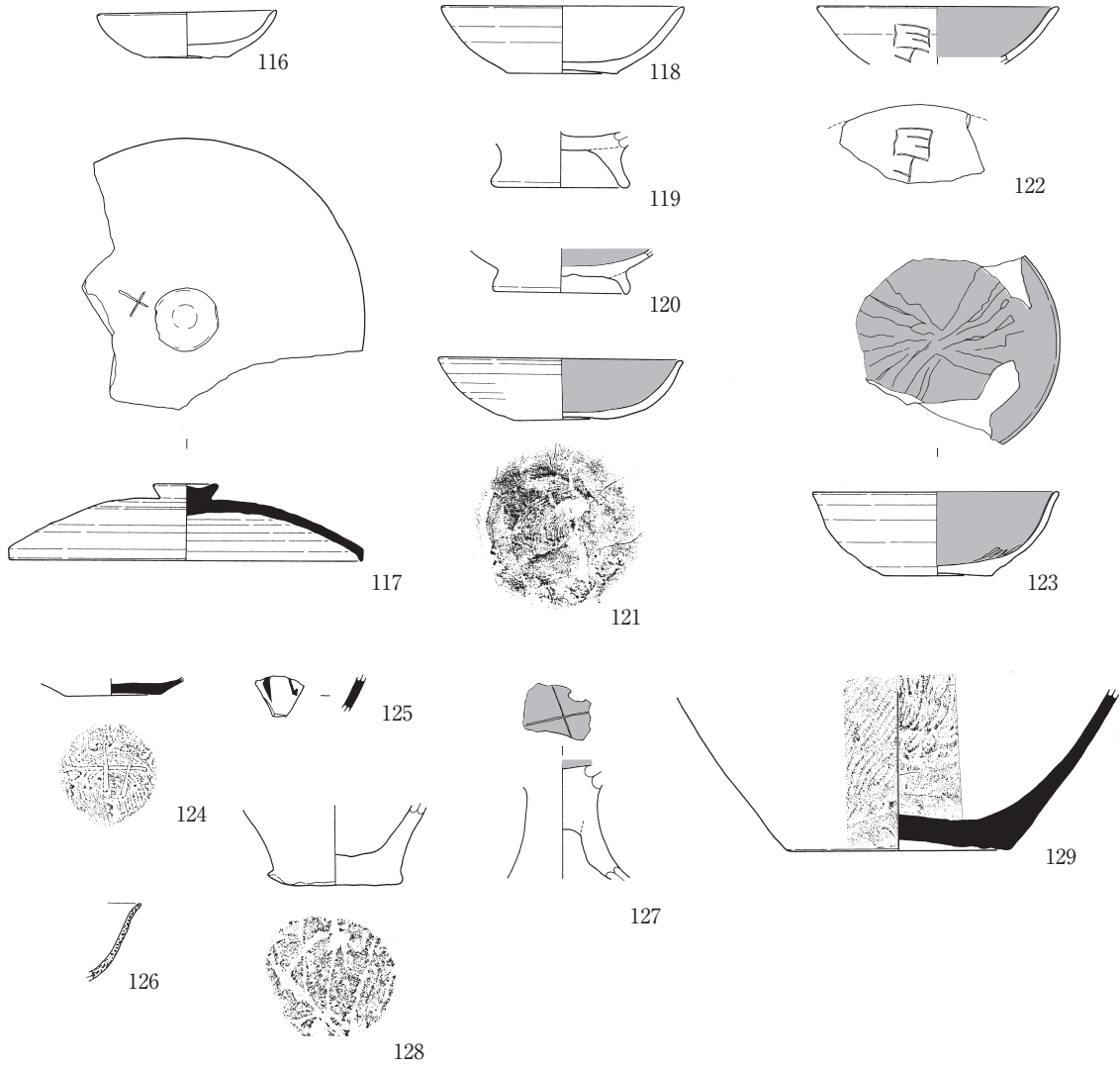


115



图28 遺物実測図8 (S = 1/4)

検出面・包含層 (116 ~ 129)



土製品 (130・131)

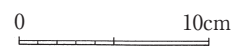
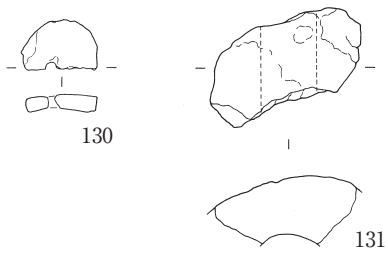
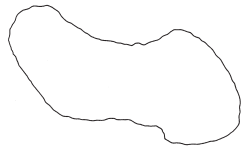
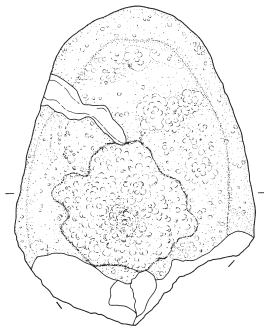
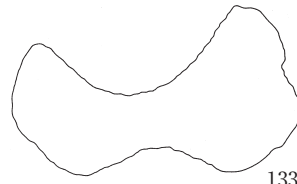
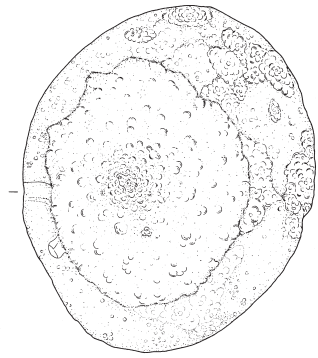


図29 遺物実測図9 (S=1/4)

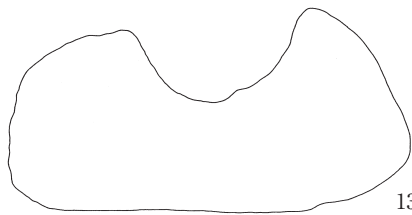
石製品 (132 ~ 134)



132



133



134



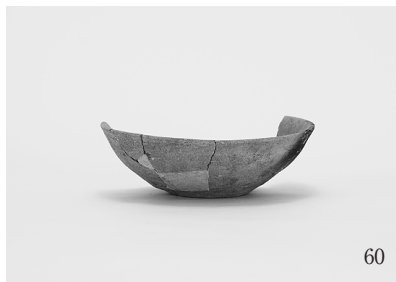
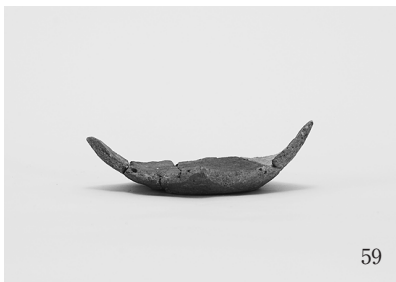
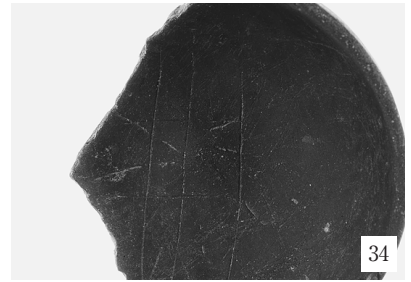
图30 遺物実測図10 (S = 1/4)



遺物写真1



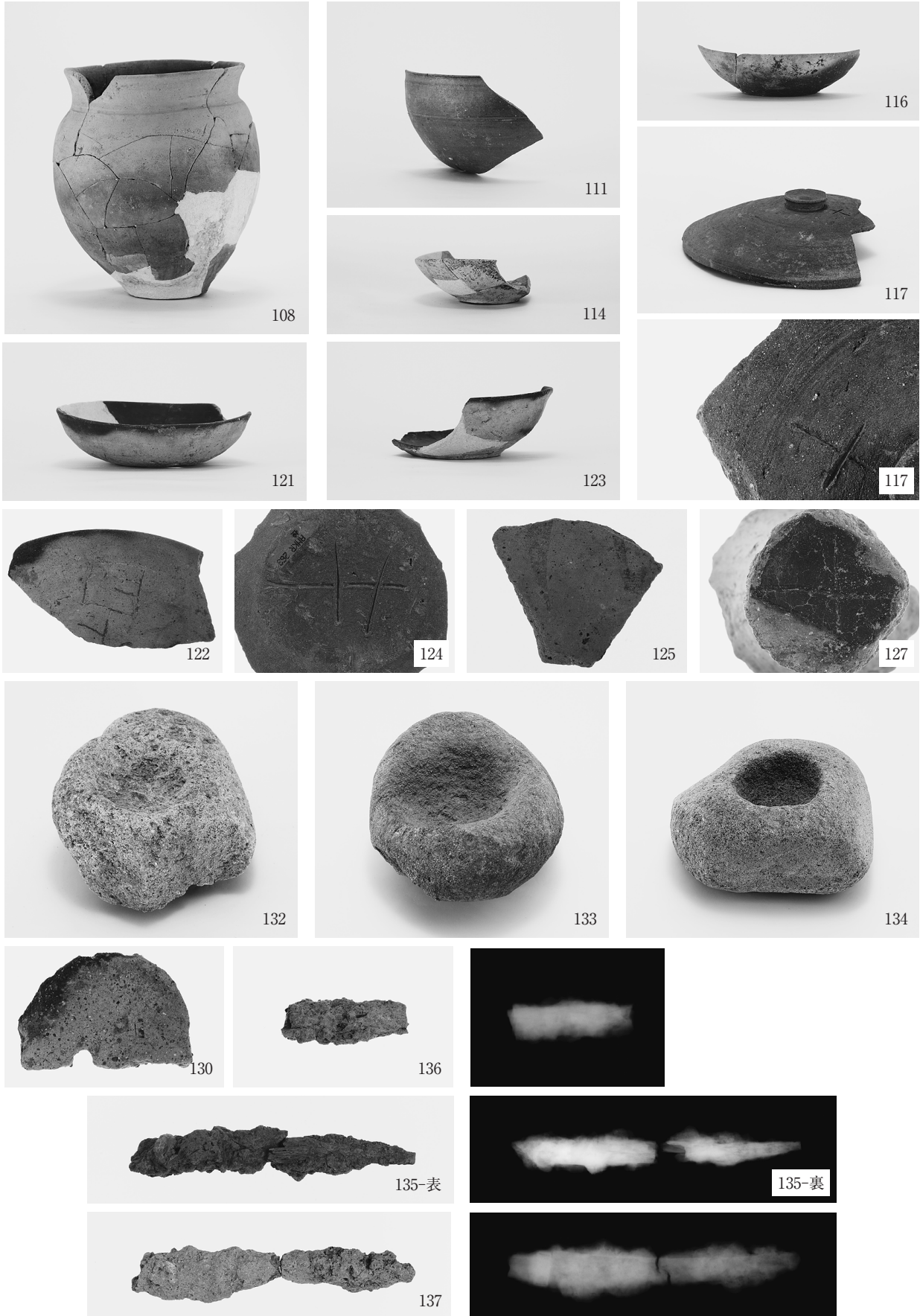
遺物写真 2



遺物写真 3



遺物写真 4



## 第4章 まとめ

三輪遺跡 北野建設第二寮地点では、竪穴住居跡18軒、溝跡1条、土坑5基、小穴2基を検出した。特に竪穴住居跡数は、三輪遺跡の既往調査の中では最多となる。時期を特定できる遺構は、古墳時代後期の竪穴住居跡11軒および土坑1基と、平安時代の竪穴住居跡7軒および土坑2基である。この他、時期は特定し得ないが遺構の重複関係から平安時代以降に掘削されたと考えられる遺構に、溝跡1条と土坑2基がある。遺物は、主体となる古墳時代後期と平安時代の他、弥生時代後期と中世のものを確認した。弥生時代後期および中世の遺物については、包含層出土のカワラケ(116)以外は土器小破片のみで、遺物全体に占める割合もごく少量に留まっている。本調査地においては、古墳時代後期および平安時代を主体に集落の形成が認められた。以下、この二時期について検出した資料を基に概要を記述するとともに、集落範囲について述べる。

古墳時代後期の竪穴住居跡は、平面形はいずれも隅丸方形を呈すと推定される。住居の規模は、一辺が4.5m前後を測るものが多い。規模を確定できる住居の中で最も小型の住居は、3.7m×4.2mを測るSB6、最も大型のものは一辺6.2mを測るSB5である。本調査地と同様に古墳時代後期の竪穴住居跡を多数検出した三輪小学校地点では、該期の住居跡は一辺5m以上を測ることから、同地点に比べて本調査地の竪穴住居跡はやや小型な傾向が認められる。古墳時代後期竪穴住居跡のうち、SB1、3、4、5、6、16、18、19の計8軒で破却後のカマド跡を検出した。本調査地における竪穴住居内のカマド破壊行為に関しては、カマド全体を破却するもの(SB1、4、5、16)と、両袖と構築材の一部を残すもの(SB3、18、19)の2種類がある。なお、SB6では、カマドと推定した遺物集中箇所から火床と認識し得る被熱面や焼土が検出されなかった。住居の規模も他に比べて小さく、柱穴等も検出できなかったことから、作業場など住居以外の用途でつくられた竪穴建物である可能性がある。

竪穴住居跡から出土した土器は、土師器および黒色土器が主体を成す。器種は土師器の杯、甕、高杯、甗と黒色土器の杯、高杯、甗、須恵器の蓋、杯がみられる。甕は長胴形を呈すものが主体となっている。外面をハケまたはケズリで調整するものが大半である。食膳具である杯は量が少ないが、内面を黒色処理するものが主体を占め、高杯についても杯部の内面を黒色処理する個体が多い。また、高杯には須恵器を模倣したとみられる個体(99、100)が認められる。出土土器の様相からみると、本調査地で検出した古墳時代後期の集落は概ね6世紀後半から7世紀前半代の集落と捉えられる。また、竪穴住居跡の重複関係から少なくとも3時期に渡って存続したと推定できる。

平安時代の竪穴住居跡は、平面形は隅丸方形を呈す。住居跡全体を検出できたものが無いため、規模は特定し難いが、比較的広範囲を検出した住居跡をみると、一辺は概ね4～4.5mを測ると推測される。SB2でカマドの火床と見られる焼土を、SB15で煙道の可能性がある掘り込みを検出したほかは、火処と判断できる場所は検出されなかった。このため、カマド破壊行為の有無等は不明である。

これ以外に注目される遺構として、SK7が挙げられる。遺構内から多量の炭化物と焼土ブロックを検出しており、何らかの燃焼行為が窺える遺構である。

竪穴住居跡から出土した土器は、ロクロ成形の土師器および黒色土器を主体とする。土師器の杯、高台付杯、甕と黒色土器の杯、須恵器の蓋、杯が認められたほか、SB2およびSB11、12の覆土からは小片ではあるが灰釉陶器の皿と緑釉陶器の段皿が出土した。出土土器の様相から、本調査地で検出した平安時代の集落は、9世紀後半から10世紀前半代を中核とした集落と判断される。

このほか、SB14およびSB15からは刀子や韃の羽口の破片が出土した。前述のSK7を含め、集落内で小鍛冶が行われていた可能性を想定し得る資料である。

なお、調査を進める中で、古墳時代後期の遺構覆土内から平安時代の遺物が多数出土する状況や、住居床面が検出面となる遺構が散見された。また、調査区南側では遺物包含層と遺構の一部を削って、流入土が堆積している状態であった。このことから、明瞭に検出できなかった平安時代の遺構が複数存在する可能性は高く、実際には検出し得た以上に該期の遺構が存在したものと推定する。

本調査地では古墳時代後期から集落の形成が認められた。7世紀後半から9世紀前半頃にかけては居住の痕跡が希薄になるが、平安時代中期に入ると再び同地を居住域として集落が形成されている。中世の遺構は今回検出されなかったが、遺物が散見されることから平安時代面の上層あるいは近隣に中世遺構が存在する可能性は高い。

また、旧地形図によれば本調査地が乗る微高地は南南東に下る緩斜面地で、東西にはそれぞれ谷筋状に窪地が形成されている。加えて、本調査地の南側50m程の地点が地形の変換点となっており、以南は勾配を変えてやや急な斜面地を形成していることから、本調査地は尾根上微高地の端部近くに位置していることが分かり、集落はこの微高地上に展開すると考えられる。集落居住域の範囲については現時点では推定の域に留まるものの、同微高地の南端部を居住域端部とし、本調査地の北西側にかけて居住域が広がっていくことが予想される。

#### <引用・参考文献>

愛知県史編さん委員会2015『愛知県史 別冊 窯業1 古代 猿投系』 愛知県

齊藤孝正1995「I 東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録 第3巻 東日本編I』 雄山閣出版

霜田 巖1967「新産都市建設の為の埋蔵文化財緊急調査報告（長野市）」『長野』第12号 長野郷土史研究会

鳥羽英継2000「善光寺南縁の古墳時代前期～古代の土器編年（3世紀後半～11世紀後半）」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—総論—』

（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書54

中村 浩1976「大野池、光明池地区の須恵器編年に関する諸問題」『陶邑I』 大阪府教育委員会

（財）長野県埋蔵文化財センター2017『浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書113

長野市誌編さん委員会1997『長野市誌 第1巻 自然編』長野市

長野市誌編さん委員会1997『長野市誌 第2巻 歴史編』長野市

上水内郡誌編集会1976『長野県上水内郡誌 歴史編』

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん みわいせき 9
書名	浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡（9）
副書名	北野建設第二寮新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第154集
編著者名	飯島哲也 篠井ちひろ 田中暁穂 鈴木時夫
編集機関	長野市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL：026-284-0004 FAX：026-284-0106
発行年月日	2019（平成31）年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
みわ 三輪遺跡	ながの ながの 長野県長野市 三輪三丁目 619番2、619 番6	20201	A-059	36° 39′ 43″	138° 12′ 21″	2017.7.24 ～ 2017.9.12	580㎡	集合住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
三輪遺跡	集落	古墳時代後期  平安時代		古墳時代後期 竪穴住居跡11軒  平安時代 竪穴住居跡7軒		土師器 須恵器 灰釉陶器 緑釉陶器 金属製品 石製品 土製品 カワラケ		

長野市の埋蔵文化財 第154集

浅川扇状地遺跡群

## 三輪遺跡（9）

平成31年 3月22日 発行

発行 長野市教育委員会  
編集 文化財課埋蔵文化財センター  
印刷 大日本法令印刷株式会社